

〔鶴見大学仏教文化研究所紀要〕第14号（平成21年4月）抜刷

翻刻・京都大学文学部図書館蔵『南禅清規』（一）

尾崎正善

翻刻・京都大学文学部図書館蔵『南禅清規』（一）

尾崎 正善

はじめに

今回翻刻する『南禅清規』二巻二冊（大永五年（一五二五）頃成立）は、京都大学文学部図書館所蔵（請求番号・京都大学・Ind-ph-Q36）である。詳しい書誌に関しては後に論ずるが、本清規は表題が示すように南禅寺関係の清規であり、京都大学文学部図書館所蔵の無著道忠（一六五三―一七四四）関連資料の一つである。

本資料に関しては、すでに「清規研究の問題点―南禅寺関係の清規紹介を兼ねて―」『禅学研究』第八〇号（平成一三年（二〇〇一）二月）・「翻刻・龍谷大学蔵『南禅諸回向』」『鶴見大学仏教文化研究所紀要』第一二号（平成一九年（二〇〇七）四月）において紹介を行った。特に後者の論文には、南禅寺関係六系統の清規を一覧にしており、本清規の位置付けに関しても詳しく紹介しているので、そちらも合わせて御覧頂きたい。

さて、先の論文にもすでに述べたが、筆者はこれまで禅宗清規の史料収集・翻刻紹介を数多く行ってきた。その作業は曹洞宗に限定せず、臨済系の史料も視野に入れて扱ってきた。特に南禅寺関係のものに関しては、まとまった数の史料が確認されていることを先の論文ですでに述べている。これまで継続的に南禅寺関係資料の翻刻紹介を行ってきたが、本論もそうした一連の作業の続きとであることを御理解頂きたい。

なお、本清規は乾・坤の上下二巻本であるが、紙幅の関係もあり、今回は上巻のみの翻刻となった。下巻に関しては、次号の『仏教文化研究所紀要』にて翻刻予定である。また、解説に関しては、上下巻の区別なく論じているので、詳しくは次号の論文と合わせて御覧頂きたい。

一、表題ならびに形状

最初に、本清規の簡単な書誌を記しておく。

〔南禅清規〕

上巻（乾）

外題 南禅清規 乾 （題箋）

内題 五山之上瑞龍山太平興国南禅寺規式 卷上

形状 縦二七・七センチ・横一八・七センチ

丁数 九八丁

下巻（坤）

外題 南禅清規 坤 (題箋)

内題 五山之上瑞龍山太平興国南禅寺規式 卷下

奥書 寶永己丑七月初旬、得_レ南禅規式一書、多年疑冰泮然者不_レ一。及_レ謄寫訛文盤踞甚夥_レ焉。其著_{シキ}者_ノハ、

直_ニ改正。或又且_レ存_レ之、題_ニ於其上方_ニ義辨復別作_ニ此_ノ校訛_一、小寓_ニ評隲_一云、

九月晦日 龍華道忠識

形状 縦二七・七センチ・横一八・六センチ

丁数 九六丁 (下卷八一丁・附録八丁・校訛七丁)

上下二巻本で欠損はない。但し、江戸期、無著道忠の書写であるので、その時点で不明の箇所、また誤字・脱字と思われる箇所もある。これに関しては、巻下の道忠の「校訛」の箇所に詳しいのでそちらを確認頂きたい。

二、成立過程

次に『南禅清規諸回向』の成立過程について確認しておこう。なぜ、成立時期とせず過程としたかといえば、本清規はすでに述べたように、江戸時代、無著道忠の書写本であり、その時点までに幾たびか手の入っていることが想定されるが、その段階を特定できないからである。

さて、史料中に記される主な年号を見ると以下のようになる。(記載年号総てではない)

永仁元年 (一一九三) * (下・附録1a、1b)

貞治六年 (一一三六) * (下・附録8a)

貞治二年 〔一三六三〕 * (下・附録2a)
 文安丁卯 〔一四四七〕 * (下・附録2b)
 文明十九 〔一四八七〕 (下・13b)
 長享三年己酉 〔一四八九〕 (下・81b)
 明應二年癸丑 〔一四九三〕 (下・58a)
 文龜二年壬戌 〔一五〇二〕 (上・35a)
 永正四丁卯 〔一五〇七〕 (下・1a)
 永正九年 〔一五一二〕 (下・73b)
 永正十二 〔一五一五〕 (下・70b)
 永正十三丙子 〔一五一六〕 (下・17b' 18a)
 永正十五年 〔一五一八〕 (上・24a)
 大永三年 〔一五二三〕 (上・20b' 21b' 35b' 58a' 下・1b' 14a' 17b)
 大永五年乙酉 〔一五二五〕 (下・36a)
 天文五 〔一五三六〕 (下・74a)
 寛永己丑 〔一七〇九〕 (下・校訛7a)

このうち、永仁二年から文安四年までの*を付した年号は、下巻の附録の箇所ですべて引用箇所であり、本清規の編集年度を特定するものではない。

これに対して、大永三年の年号は、

長慶元年、敕謚大智禪師、塔曰大寶勝輪。至大永三年癸未歲、凡八百年歟。(上・21b)

教至中夏、即後漢永平十年戊辰歲也。至當年大永三癸未歲、而滅後二千四百七十二年也。(上・35b)

至當年大永三癸未歲、百十六載乎。(下・1b、14a)

というように、記述の年を確定する内容を記した箇所を確認できる。

また、大永五年も「傳供之次第」の箇所で

大永五年乙酉、十月五日者、乃初祖菩提達磨大師之、一千年忌也。(下・36a)

という記述から、成立の段階での記入と考えられる。

なお、天文五年は、

大燈國師二百年忌、嚙金事(下・74a)

という、下巻の最後の部分で、次の「附録」の項のように書き足したと想定される。つまり、大永五年に成立した清規に、後世付加された箇所と考えるのが自然であろう。

次に、「惟敬」という禪僧に関して指摘しておこう。この禪者の名前は、本清規中に十四回にわたって確認できる。

多くの場合、「惟敬云」であるが、「惟敬紀綱ノ時、二月十二日」(上・30a)、「彦林・蘭坡和尚學之惟敬存日ノ礼子、最可也。畧規不用也」(下・36b)、「惟敬西堂」(下・74a)という記載が見られる。生没年をはじめとてかれの生涯に関しては現時点では不詳であるが、本清規の記述に依れば南禅寺で紀綱寮(維那寮。または監寺寮か)の役職に就き、一山一寧の二百年の遠忌(一五一六)の時点で西堂職にあったことがわかる。彦林和尚も蘭坡和尚に

関しても現時点では不詳であるが、この記載は「傳供之次第」の箇所であり、ここには南院國師（規菴祖円 [1261-1313]）の二百回忌（一五二二）と、大永五年の菩提達磨一千年忌の話が記される。

これらにより、惟敬は一六世紀初頭に南禅寺で活躍したと推定される。と同時に本清規に大きな影響を与えるほどの活躍をしたことが窺われる。この「惟敬」に関しては、今後の課題として挙げておきたい。

また、「應仁亂以後」（下・34a）という語が見られるので、応仁の乱（一四七四）以後であることは間違いない。

以上の諸条件により、本清規は大永三年から五年頃にかけて制作され、天文五年頃加筆、そしてその後、附録部分が加えられ、最終的に寶永六年、無著道忠、五四歳の時書写したものと考えられる。その時点で、「校訛」も付されたであろう。

ただし、寶永六年時点で一括して書写されているため、原本にあったであろう筆跡の違いは全く確認できない。であるから、その段階及び細かな加筆・訂正の過程に関しては裏付けを取ることが不可能であり、あくまでも推測の域を出ない。このため最終的な結論を得ることは出来ない。

三、構成と特徴

次に、本清規の内容に関してその構成と特徴を簡単に述べることとする。

まず、本清規の構成を簡単に示すならば、上巻は正月一日から始まり四月末まで、下巻は五月から始まり二五丁目までが十二月大晦日という年中行事。それ以降は、「土地堂念誦」「出班借香」「両班出班次第」「小参」「雜記」「傳供之次第」と諸行事に関する記述が続く。このように、年中行事を基本にしなが、各行時の次第や疏・回向

文・諸注意等を詳細に記録している。そして、後世付加された「附録」、無著道忠の「校訛」という構成である。

さて附録には、「紀綱寮ノ本、回向双紙跋」「應菴祖師遺像贊」「延曆寺申状」「南禅寺正眼院本光国師宗論」「續正宗論（東福ノ定山和尚送五臺山）」「任嘉元寺例急速可被撤却南禅寺事」六項目を載せる。これらは、本清規成立以前の各種史料であり、清規の本文に続いて書き加えられていたか、後世の編集段階で組み込まれたと考えられる。校訛の部分は、無著道忠の書写の時点での注書きと思われる。上・下・附の別を記し、丁数を明示してその疑問点を指摘している。

次に本清規の特徴について述べてみたい。本清規は、年中行事を軸としながら、その年中行事の項目の単なる羅列・次第のみを記すのではなく、各種法要の詳細な進退・諸注意に関して定めており、当時の儀礼の様子を克明に知ることが出来る。

例えば、正月元旦の項目には、当日の行事の項目が列記された後に、「寢堂茶湯之圖」「上堂」「塔下禮」「點心坐牌圖」「湯禮」「修正看經榜」「修正經懺之榜」という詳細な記述の後に「齋前」「齋罷」「懺法」の配役表があり、当日の行事をくまなく網羅している。

そして、特徴の第二点は、それぞれの解説の中に『校定清規』・『勅規』・『大鑑清規』、さらに過去の事例等の引用・解説を積極的に行っていることである。

このような他清規の引用は時代的には当然のことではあるが、こうした引用を積極的に明示している点、さらに先にも述べた「惟敬云」、そして「古規云」「私云」というような注に相当する記述も散見できる。これにより当時の禅院の様子、さらに過去の清規との比較、編集の時点での私見と、様々な角度からその時代の状況を窺うことが出来る。

また、『仏教文化研究所紀要』で翻刻紹介している南禅寺関係の清規の引用が多い点が特筆される。それは、『大鑑清規』・『叢林拾遺』（東漸和尚略清規）・『南禅諸回向』であるが、このような清規の引用が多い点は、南禅寺において長年にわたり先に挙げた諸清規が参考にされながら、時代毎の要請により取捨および変化を遂げてきた証であろう。

こうした点も、南禅寺全体、さらには臨済宗の清規を考える上では多いに参考になろう。次に各種清規の引用状況を指摘することとする。

【『備用清規』・『校定清規』・『勅修清規』】

中国成立清規の引用は、それほど多くはないが、補足説明的に記される場合が多い。

例えば、「方丈點湯」の項目に

備用曰、若借座、借鼓則鳴法堂下間鼓。

校定曰、如首座西堂秉拂、則借茶鼓（上・76b）

と、二つの清規が続けて引用される。

『勅修清規』も同様である。

「答拜」の項目に、

勅規、左方好ト有也。（下・79a）

とある。

中国の清規はいわば基本であるので、特にそれを明記せずとも引いている可能性があるが、少なくともこうした指摘をしながら本清規を補完していることは確かである。

【南禪寺関係清規】

次に『大鑑清規』、『叢林拾遺』（東漸和尚略清規）、『南禪諸回向』である。

『大鑑清規』は、「大鑑禪師」という項目立ても含め、八回確認できる。「半齋」の項には、

大鑑清規云、佛誕生^ト、成道^ト、涅槃^ト、斯日、住持若他縁者、兩班有出班焼香、此山門公界礼也。（上・42b）
とあるように、先の中国の諸清規と同様に補足説明として引用される。

これに対して、『叢林拾遺』（東漸和尚略清規）は、全文の引用が多い。例えば、四月の項目（上・30b）には「略規」とあるが、これは『東漸清規』「靈祠祭肅・大帝誕生」と同一である。（但し、若干の字句の異同はある）このように「略記」の引用箇所は七箇所ある。この七箇所の中には「略規祈禱章」（上・27a）という形式もある。

さらに、「畧規」ではなく、「土地堂念誦圖・東漸和尚出斯圖」（上・58a）と直接「東漸和尚」の名で引用する場合もある。

また、「入浴」（上・43a）に関しては、特に断りはないが、『東漸清規』とほぼ同文である。そして、「前住遷化」（下・78a）は「規云」といだけで清規名を記さないが、これも『東漸清規』からの引用である。このように、特に明記することなく記述する場合もあるので、特定が困難な場合もあるが、『東漸清規』からの引用箇所は多い。

このように『東漸清規』重視の傾向は、巻下の「白椎」の項に、
頃^ロ一花翁、或東漸和尚、住東福日、維那請白槌。請客侍者、致謝問訊。（下・58b）（傍線筆者。以下同）
とあるように、東漸の過去の行履を引用することにも現れている。

同じように、『南禪諸回向』との共通点も多い。

「清水寺懺法規式之事」（上・23b）は、同一ではないが『南禪諸回向』にもある。同じように「前代壁書」（上・

24a) も同様である。

さらに、「看経榜」(上・31b)は、『南禅諸回向』の「大帝誕生看経榜」と、そして「盂蘭盆結縁経榜」(下・6a)も『南禅諸回向』と同文である。このように「榜」の書式を継承している箇所も多い。

【古規・舊規】

次に、特定の清規ではなく「古規云」という引用は、これは四箇所ある。それは、

古規云、西序亦兩展三礼。當時無此礼。(下・61a)

というような形式である。

また、同様に「舊規」は十八箇所ある。

舊規者、歳日粥已前、行五味粥、以鎖子少受。(上・7a)

舊規、大悲咒、次赴塔下、楞嚴咒。今者、自塔頭、被辭間、於祖堂勤之。(下・26a)

請立班事。舊規者、一節立也。今時者、一節立也。(下・29b)

これらも、「古規」と同形式の記述であり、内容の補足説明のために記されている。

いづれにせよ、内容を補い、より行事を深く理解させようとする意図が感じられる。その結果「舊規」と「今者」という、具体性の強い記述が見られることとなった。

こうしたことが記されるのは、この時代様々な形式、各寺院での相違等が顕著になったため、必要に迫られて記載されたであろう。逆に見るならば、そうした記述を丹念に洗い出すと、その変化の段階、改変の意図が見えてくるのではなからうか。

【惟敬】

成立年次を考えるときにも指摘したが、本清規には「惟敬」という禪者の名が十四回確認できる。少し煩瑣になるが、その全ての箇所を挙げてみたい。

惟敬云、正月吉初日早晨、大悲咒七反、消災咒七反。(上・16b)

惟敬云、善月祈禱、自十八日三箇日、就衆寮、轉藏經。(上・26b)

惟敬云、僧堂祈禱之看經。首座者、首座牀、又已下之頭首者、如恒。(上・28a)

惟敬曰、公方御誕生日、就僧堂、毎月大悲咒、金剛經、觀音經、消災咒、就佛殿滿散、楞嚴咒。(上・29a)

惟敬云、右維那時、僧之楞嚴頭者、今上方超華和尚、喝食之楞嚴頭者、聽松靈翰喝食有麟也。(上・29b)

惟敬云、當寺楞嚴頭、小維那、重物之事、舊者紅梅之紗縫物也。(上・30a)

惟敬紀綱時、二月十二日、就德雲院御成、維那被召寄、以瑞西堂、從今已後者、畧紅梅之紗可爲。(上・30a)

惟敬云、維那一代、於維那寮、沙喝點檢有之。此時小維那、呼其名。點檢了、沙喝玄關兩立班、維那中央立、

莫勤行懈怠、件件垂示、而散之。(上・63b)

惟敬曰、前堂之請帳者、上方、客東堂、參假西堂、客西堂、皆載之。(上・69a)

惟敬云、當日、三大禪師草飯、坐牌、前板後板也。(上・70a)

惟敬云、俄欠事、則新戒轉上坐、令勤之。(上・89b)

惟敬存日、礼子、最可也。畧規不用也。(下・36b)

惟敬西堂 (下・74a)

惟敬曰、公方御誕生日、就僧堂、毎月大悲咒、金剛經、觀音經、消災咒。(下75a)

以上のように当時新たに書き加えられた規程が、具体的に誰の意見によるものか明記されたものは少ない。そう

した意味からも、本清規は重要である。

【私・古者】

次に、「私云」という、人物を特定出来ないが、意見・引用が確認できる。これは五箇所である。

私云、軍拜者^ヲ萎拜^ス、女人拜同。(上・72a)

私云、不^レ勞^二頭首^一、免^レ之^二歟^一。見^二僧史略^一。(下・64a)

以上のように、私の意見として補足説明がなされているが、これが一体誰が述べたものなのか、編者が当時一般的に言われていたものか判然としない。

例えば、「私云、不^レ審」(上・92b)というように直接的な疑問を呈する箇所もある。

その一方で、

私云、此時方丈、玄關、衆寮首座寮^ノ板、庫司^ノ板、同時^二三通鳴之^一。(上・85a)

と記される箇所は、『東漸清規』からの引用であり、必ずしも特定の人物の意見でない場合もある。

また、「古者」という、特定の規程・清規ではないが、伝統的な事例と比較したであろう箇所が、十六箇所ある。中でも次の一段は興味深い。

古者監寺勤舊、不^レ著座。應仁亂以後、逐^二先規^一、入院^二二代不^レ著^一。然^レ超隆都寺云、二代不^レ著無^レ謂^{ハシ}、致^二訴訟^一。

近代列座。天龍寺者、亂後之入院、二三代不^レ列座。舊座牌^ノ圖無^レ列座、分明也。依舊圖、近代入院不^レ著也。

(下・34a)

内容に関しては触れないが、ここには「古者」「超隆都寺云」「天龍寺者」「舊座牌ノ圖」というように、過去の事例、特定の人物の意見、他寺院での事例との比較が述べられる。繰り返しになるが、こうした点を見ることが本

清規では重要である。

【『宝林伝』】

最後に『宝林伝』からの引用が確認できる。

天竺者、不知年隔。或見雪知。是故古年謂_レ白也。三十三白忌_ト謂者、斯意也。寶林傳有之。(下・30a)

まず、この内容は年度の数え方を「白」という単位で示す論拠を『宝林伝』に求めている。

因みに『宝林伝』には、「白」に関する記述が三箇所確認できる。

更待三白(巻五)〔『宝林伝訳注』・二四六頁〕

此師滅来五十八白(巻六)(同右・三三三頁)

中天竺国、冬遇雪。以此名之、呼為一白。(巻六)(同右・三三五)

特にこの巻六に関しては、常磐大定氏が京都粟田の青蓮院から発見紹介したもので、その寺院の所在地は、地理的に南禅寺からすぐ近くにあり、これを拝読することも当時可能だったのではないか。

これは、『宝林伝』の日本における記述の最古のものと思われる。これに関しては、その指摘までに止める。

以上のように、本清規はすでに『仏教文化研究所紀要』で翻刻紹介した『大鑑清規』、『叢林拾遺』(東漸和尚略清規)さらに『南禅諸回向』の諸清規と合わせ見ることにより、より明確な位置付け、性格付けが出来ると思われる。

これは、南禅寺の清規の変遷を時代を追って確認できるという好箇の資料なのである。

おわりに

以上、成立時期と内容を述べてみた。すでに述べてきたことであるが、南禅寺関係の清規史料の翻刻紹介を行うことにより、相互の詳細なる内容の点検及び関係、引用の状況、過去の事例との比較、さらにはそれぞれの清規が後世の清規に与えた影響などを体系的に明らかにすることができるとはなからうか。

そうしたことに寄与できることを祈念して本論のまとめとしたい。

*最後に、本資料の閲覧及び翻刻を御快諾下さった京都大学文学部図書館に対して一言記して謝意を表したい。

凡例

一、京都大学文学部図書館所蔵『南禅清規』の翻刻である。

但し、上巻(乾)九八丁の翻刻である。

一、本清規は、上巻(乾)九八丁、下巻(坤)八一丁・附録八丁・校訛七丁で欠丁はない。

一、翻刻にあたっては各項目毎の改行箇所及び空白に関しては、原本に準じたが、それ以外の改行箇所に関しては紙幅の関係もあり、すべて送りとした。

従って、改頁の箇所も送りの部分があり、本文中に(1a)等の記号が挿入されている。

一、返り点・ルビに関しては、原本に忠実おこなった。

一、原本では朱点で字句の区切りを行っているが、句読点の区別はない。これら区別は便宜的に筆者が付した。

一、字体の相違もできるだけ原本通りとした。

応―應・略―畧・貳―二・礼―禮等。

しかし、俗字・異体字・略字に関しては全部、あるいは部分的に字体をあらためたものもある。

退―遡・様―様等。

一、寺院名・人名の傍線「―」・書名の傍線「||」・年号「||」の朱線が存するが、煩雑さを避けるため割愛した。

一、割注・註記等も、原本に準じた。なお、これらが朱書きの場合もあるが、これは特に指示しなかった。

一、(一)で示したのが丁数である。Iは上卷(乾)、IIは下卷(坤)、附は附録、校は校訛を、数字は冒頭からの通し番号、㊦は表裏を示す。

参考論文

〔翻刻・聴松院蔵『大鑑清規』〕

『鶴見大学仏教文化研究所紀要』第五号・平成一二年(二〇〇〇) 四月

〔翻刻・京都大学文学部図書館蔵『叢林拾遺』(東漸和尚略清規)〕

『鶴見大学文学部研究紀要』第三八号第四集・平成一三年(二〇〇一) 三月

〔京都大学文学部図書館蔵『叢林拾遺』(東漸和尚略清規)について〕

『鶴見大学仏教文化研究所紀要』第六号・平成一三年(二〇〇一) 四月

〔清規研究の問題点―南禅寺関係の清規紹介を兼ねて―〕

『禅学研究』第八〇号・平成一三年(二〇〇一) 一二月

〔月中・年中行事清規三本の紹介―『南禪諸回向』・『建長寺年中諷經並前住記』〕

・『瑞鹿山圓覺興聖禪寺月中行事・年中行事』―

『鶴見大学仏教文化研究所紀要』第九号・平成一六年（二〇〇四）四月

〔翻刻・龍谷大学蔵『南禪諸回向』〕

『鶴見大学仏教文化研究所紀要』第一二号・平成一九年（二〇〇七）四月

南禅清規 乾 (表紙)

五山之上瑞龍山太平興國南禅寺規式 卷上

如来大師并闔山清衆札 此札維那寮客殿掛之

左 如来大師入般涅槃至今日日本國年号幾年支干已得二千幾百一堂司一誌

右 闔山清衆七百員沙弥幾箇喝食幾輩

堂司某誌

此札、方丈礼間掛焉

闔山清衆七百員幾人 沙喝百二十人

寺 華題也。釋名曰、寺ハ、嗣也。謂治事者、相嗣續於其(ハ)内也。故天子有九寺焉。後漢明帝、永平十年丁卯、佛法初至ル。有印度一僧摩騰・法蘭、以白馬馱經像。届洛陽、敕於鴻臚寺安置。鴻臚、即司賓寺也。胡廣釋云、鴻臚、秦有典客、漢乃因之、也。臚傳也。所以傳聲贊道九賓也。至唐改爲同文寺。至二十一年戊辰、敕於雍門外、別建寺。以白馬爲名。即漢土佛寺始也。吳孫權立建權立建初寺。爲始也。

道場 肇云、閑宴修道之處、謂道場。隋煬帝敕、遍改僧居、名道場。

方丈 蓋寺院之正寢也。始因唐顯慶年中、敕差衛尉寺丞李義表、前融洲黃水令王玄策、往西域、充使(一)。

至毘耶黎城ノ東北四里許ニ、維摩居士ノ宅示疾之室遺址。疊石爲之、王策躬以三板、縱橫量之、得十笏。

正月

元旦 五更板鳴、鄉曲法眷小師、皆當詣方丈、插香展礼、賀歲也。

祝聖、僧藥師如来、寢堂茶。

次赴祖堂、都寺供茶湯、住持燒香。

次開山諷經畢、都寺供茶湯。

次住持燒香畢、歸雲諷經舉之。

次喝食藥師如来。磬者、鈴番勤之。

次維那詣方丈、盛坐牌

但元旦與星夕、
自方丈勤之

次上堂、預搥鼓三通

四節同

(1・2b)

次暨三鼓時、住持出寢堂。

兩班谷渡問訊、而法堂正面、自脇間入。

次向法座排立問訊。兩列歸本位立。

次住持、自後門入。過知事之後。

次向大衆、普同問訊。

次向法座問訊、叉手過拜席。

次隨登階、搥舉鼓、結座語了、下座。

次塔下礼。

次函丈點心、湯礼有之。

次齋前 次齋了 次放参 (1・3a)

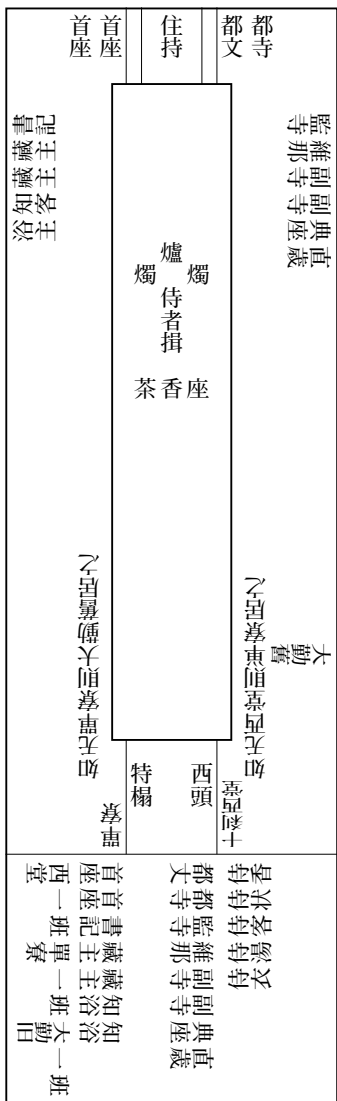
修正齋了、鳴鐘如齋前也。看經。次放参。平日者楞嚴咒、大悲咒。修正看經中、畧「大悲咒」。只楞嚴咒、消災咒計也。

勤行規式次第誌焉。

曉僧藥師如来、大衆和南。次維那舉大悲咒、并消災呪畢。次釈迦如来、大衆和南。維那舉回向。

寢堂茶湯之圖

(1・3b)



先行者鳴寢堂板、住持入寢堂、座前立。燒香侍者、門外左邊立。接入、先知事全班、對「侍者」、雁立問訊。次頭首

全班入、次單寮大勤舊入、各歸位立。燒香侍者入、揖座問訊。衆坐。侍者進爐炷香。退中立問訊、鳴板二下。進盞。四首行者、手取喫茶畢。侍者問（・ㄟ）訊揖茶畢出。行者鳴板一下。收盞。又鳴板三下。衆下床。住持進爐前、兩序勤舊、對住持問訊、謝茶。住持送一步、衆同問訊揖出。赴開山塔諷經。侍者隨出。次鳴鐘、開山諷經。次歸雲諷經。次喝食藥師如來。

上堂

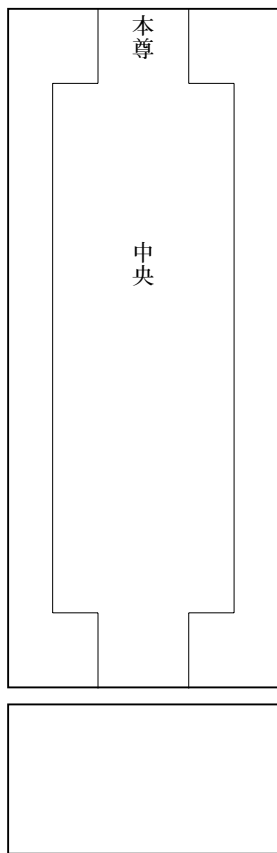
先_レ兩班、谷渡問訊。是者入僧堂。各坐禪。鼓二通之始攪礫時、下床。經東廊西廊、上佛殿之脇之塔、從佛殿脇一、至_レ后門一、東西出合而出、一列並、而舉_レ法堂。今者如形之規式、於法堂前、勤之、自正面脇之間（・ㄟ）入、向_レ法座一。一行排立問訊。是座前問訊也。次兩列歸本位。各排雁立、行者立東班知事後。」燒香侍者轉鼓一通時、法座左邊立。候兩班集。歸班立定。轉三鼓時侍者入寢堂。住持問訊請出。行者持行燈先行、住持下椅子。問訊、出寢堂、沙喝隨後。自法堂后門入、過知事後、向大眾、普同問訊。又向_レ法座一問訊、叉手過拜席上、升座。正面立、隨登階、緩擲鼓、一階時、打擲也。侍者同登。瓣香入香合蓋、捧之。住持祝香訖、渡與侍者。侍者以左手立_レ爐二也。從香以_レ右手。一步自_レ住持與_レ退。問訊、下_レ法座一。住持就座。」衣鉢（・ㄟ）侍者引出法座右邊、侍伏侍客持藥、中間一列問訊歸位。侍香引_レ前。」次首座、引_レ諸頭首、向_レ法座問訊、頭首歸_レ班、首座引_レ前。」次知事出班、直歲引_レ前。行者隨問訊、都寺引_レ前。」次西堂二班、出問訊。」若座下、本寺參假東堂、則西堂之次、問訊畢也。」次燒香侍者、登座燒香、用左手、轉身住持左邊問訊、請說法畢。次進拂子、釣語、禪客問話、激揚此道。」問答畢、叙謝曰、陞座次、伏惟、山門兩序、東班諸位禪師、西班諸位禪師、諸大西堂和尚、單寮耆宿、蒙堂前資、小寮辦事、雲堂海衆、暫到高賓、現前一會、諸位禪師（・ㄟ）各各道體、起居萬福。」次結座語畢、下座

塔下禮

先住持下座。立上間與西堂人事、西堂各各挿香、觸禮一拜。」次東序、都寺維那、與長老立班問訊、都寺立瓣香、出坐具端、欲開兩度。長老依被辭。觸禮一拜退。即是兩展三禮也。」次西序、挿香、觸禮一拜。次單寮挿香、觸禮一拜。」次住持倚椅子、焼香侍者挿香、一列大展三拜。」次沙彌頭、挿香、行者參頭、一列大展三拜。次就于函丈點心。

點心坐牌圖

(1.6a)



就主位、侍香接入問訊、先客長老。次參假西堂一列、次單寮、次勤舊、次東兩班、次西兩班、次上方。

湯禮

(1.6b)

先侍香接入問訊、大衆坐定。侍香出問訊、取中央之香合、先至佛前焼香、轉右歸中央焼香、即香合案中央、一步退而問訊立也。」入銀盞、湯瓶相隨、大衆飲了、侍香又問訊、而出戶外、即歸付坐牌也。聽侍香進銀盞、湯瓶相隨。大衆持盞相待、侍香吞了時、一度揖礼。

次鳴鐘、齋前、先大悲咒、大般若、觀音經、消災呪三反。」次齋了、次放參。」修正五箇日、畧大悲咒、施食。舊規者、歲旦粥已前、行五味粥、以鎖子少受。小土器、少盛醋、行之。但醋、五味之内也。歲旦祝儀也。(1.7a)

四節、藥師如來、請客侍者勤舊、與湯藥侍者勤舊、勤之也。題維那寮壁、差定之。

開山諷經。舊規者、就祖堂、大悲咒、赴塔下、楞嚴咒。「八金剛佛餉一分、自朔始之、上間頭金剛之前立牌供仏餉也。二日者、下間頭金剛、自九日又上間頭金剛也。

金剛牌字 此金剛今朝直日

修正看經榜

住持某和尚、令某官位書大字。某甲、書小字
年号支干、正月初五日、堂司某誌之。

山門

修正經懺之榜

此字无之。紙之次目、各有印。
此句一行之句也。非讀句。

(1・76)

右伏以、一念普觀無量劫、三萬六千日只在刹那、微塵中轉大法輪、十二部真經總爲半句、閱歲月之新新不住。居寰區而擾擾奚爲、從實際理地無動作相而起熏修、向佛事門中絕希、求心而專禱扣、原始要終之在是居安資深之所冥。入定安禪、十方世界如如不動。開經演懺、百億山河歷歷對揚。語_レ其功、天上天下希有之功、論_レ其德、世出世間異常之德。

聖皇聖后、自此享無彊之聖壽。龍子龍孫、由斯繼永固之龍圖、大功德天、大辨才天、大梵天、帝釋、持_ニ國天、增長天、廣目天、多聞天、摩醯天、密迹天、散脂天、菩提樹神天、堅牢地神、韋馱天、訶利帝、南天鬼子母天、摩利支天、日月天子、南北星君、南方_ノ德星君、周天列曜、匝漢星辰。

紙黃 今上皇帝

祠山大帝、大權修理菩薩、伽藍土地、護法明王、掌簿判官、感應使者、乙護法天童、伊勢太神宮、

八幡大菩薩、賀茂下上大明神、春日大明神、巖島大明神、諏訪上下大明神、祇園牛頭天王、北野天滿天神、熊野三所權現、府南大明神、總日本國六十餘州、諸大明神、諸大權現、各宮_ニ侍衛神祇。

紙數八十二枚、自山門之字至神祇之字、三十四枚、書之。自齋前字、至僧名堂司勝之字、四十八枚書之。

二日 土地堂諷經 次沙喝諷經 次婦雲獻粥 (一・三) 次齋前 次半齋 次齋了 次放參

土地諷經、回向之間、燒銀錢、都寺捨茶湯堂外、預行者後取銀錢置之。無消災咒。五箇日、方丈依有懺法看經、知客或侍者、勤之。

三日 祖師諷經 齋前 最勝院僧正道智和尚半齋、 次修都文 大悲咒 齋了 放參

四日 火德諷經 齋前 函丈懺摩 無差定、以如恒 齋了 放參

斯日、齋前鐘鳴、則大眾者上佛殿、看經。」懺法衆者、上方丈懺法、 次齋了 次放參 (一・10a)

五日 韋駄天諷經 齋前 次慈照院殿半齋 次維那上方丈、取疏名。

次滿散 午後鳴大鐘堂前殿鐘。」行者營辦供具茶果、住持供茶湯了、諷經、疏了、燒銀錢、都寺棄茶湯、維那舉消災咒三反、大眾散。」次東西兩班、進方丈請退。」侍者、明日早晨以後退也。故普庵諷經。侍香始之、自半齋、新維那始之。

取疏銘樣

盆上小打敷、燭臺香爐排之。將_ニ行者_ヲ上方丈_ニ、先脫帽入礼之間、長老相對問訊、維那取盆、長老面前 (一・10b) 置之。自袖取出小香合、燒香、供疏、長老接待、頂戴一覽、書銘出之。維那請取、度與行者、立與長老問訊歸。」斯時自長老、杉原檀紙、扇子、引出物、被出之。即掛諷經牌法堂前。 小牌 各具威儀、詣金剛王寶殿滿散。

六日 普庵諷經、侍香始之、侍者各退。」次鳴鐘。請前堂。 次新維那、詣方丈、立瓣香、觸禮。 次五員頭首、

詣方丈、觸礼。 次前堂都寺者、住持送寮。 次後堂已下者、新維那送寮。 次新維那、與舊維那、相對觸禮。」

次鳴鐘、半齋、新維那始之。 次各請 (一・11c) 取寮后前堂詣方丈、禮謝。 次前住忌鳴殿鐘、兩班赴祖堂。 次

出班燒香。有借香 次列拜、行者鳴手磬。次歸本位立、維那舉大悲咒。」次請新侍者。

普庵諷經畢、鳴堂前鐘、請前堂、新維那、詣方丈、瓣香觸禮一拜。然後五頭首相共、詣方丈、瓣香觸禮一拜。」前堂都寺兩人者、鳴大鐘、住持到首座寮、并庫司、自被_ル送寮_セ、後堂以下者、新維那寮送之。」次維那者主位、新兩班者賓位、相對觸禮、揖散也。」其間新維那看寮、并寮長、又舊維那看寮、并寮長、各相_{（ニ）}對、校割什物、請取讀度也。」次新維那主位、舊維那賓位、觸禮、新維那出緣、送舊維那、兩僕、新維那_ノ履_ヲ、主位_ニ、舊維那_ノ履_ヲ、賓位_ニ、取直也。」次鳴半齋鐘、新維那始之。

遷寮以後、前堂詣方丈致謝、舊五頭首、各住持送寮之。」雖然亂後者、前堂都寺計送之。故_ニ後堂以下_ノ頭首_ハ、上_レ方丈_ニ不_レ致謝也。

請新侍者事、四人之侍者、舉_テ維那寮_ニ、其時維那、立_テ紙_ニ書_ニ其名字_一、於_レ客殿_ニ對立、而適奉堂頭和尚慈旨、請某上座、某新戒、充_ニ某侍者_ニ、讀舉_{クル}也。」次維那引_ニ上_{（ニ）}方丈_ニ、挿香、大展_ニ三拜退_一。」次維那、各各送寮歸。」今时无_ス礼。行者直引_テ至_レ方丈、次_ニ舉_{クル}維那寮_ニ事者甚誤也。詳規

前住忌。半齋已前有之則早晨之次、鳴殿鐘、於祖堂、行者營辦供具茶果、鳴鉢、出班燒香、住持兩班侍者、一列向真前立、維那揖而借香問訊有之。次列拜、行者鳴手磬、三拜畢、歸本位。」鳴磬、維那舉大悲咒、回向。」西堂大眾者、不列拜。兩班侍者計也。

七日 早晨、大悲咒一返、消災咒三返、回向、是謂立諷經也。次宝篋院殿半齋。晚間、金剛經、施食_{（ニ）}有半齋、則晚金剛經。

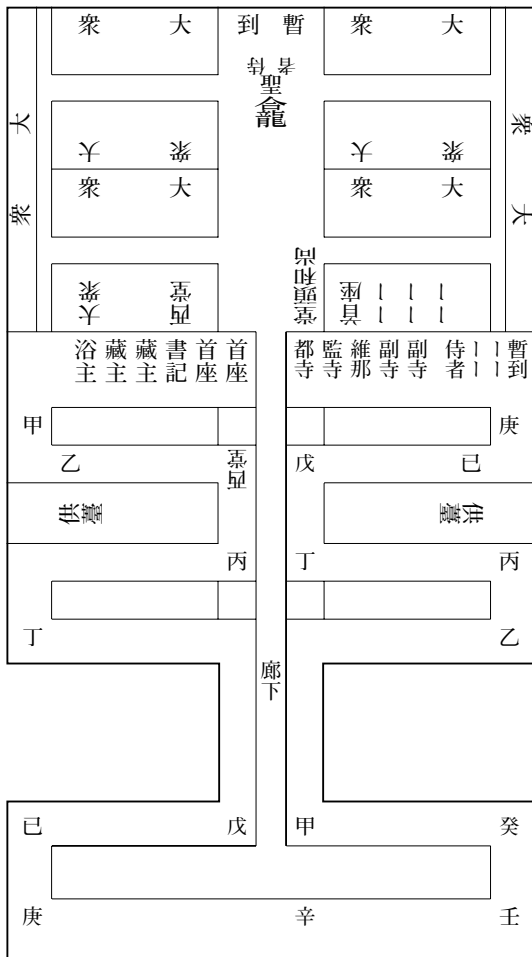
八日 早晨、如恒。」次日中、金剛經、尊勝陀羅尼三返、消災咒三返、回向。晚間、念誦。」今時詣方丈勤之。規式見于奥。次放參。但正五九月者、下_八念誦除之、凡住持首座、懈怠時者、上中八共略之。

三八念誦

至日午後、堂司行者、報衆掛念誦牌、若下八巡堂、則同掛牌、至參前覆住持兩序、先鳴方丈板、次巡廊鳴板、住持出、緩鳴大板三下、衆集依圖立定。圖在侍者隨住持、到祖堂、土地堂、大殿、燒香禮拜、鳴ニ・レ・シ大鐘。」兩序預集外堂、大板鳴、方歸圖位、住持入堂、供頭鳴鐘七下、聖僧前燒香、侍者捧香合、書狀侍者、徑歸位、請客侍者、即往西序前、巡問訊請得、次請東序、歸位、住持出堂外中立。燒香侍者隨出歸位、維那先離位、至門首、向住持立、合掌念誦三八念誦在規。大衆默念、每一號、堂前輕應鐘一聲、念疊一聲畢、維那歸位、如免巡堂。則童行出唱云、大衆免巡堂。堂司行者唱云、放參。鳴鐘諷經、如巡堂住持先入堂、前堂首座入、西堂插入、歸聖僧板、頭首領衆、三人一引、聖僧前問訊、轉身住持前問訊、ニ・レ・シ合掌巡堂、順左肩轉、依圖位立、頭首入後、維那入堂、從龕右、至上間板頭、引大衆排之、暫到侍者、隨衆入。只巡レテ半堂、聖僧レ後ロニ立。侍者ハ向レ後門ニ立。暫到ハ向レ侍者一立。今世暫到無、故侍者向龕立。」次知事入堂、聖僧前問訊、轉身住持前問訊、合掌巡堂。」暫到侍者隨後出。」燒香侍者、揖座問訊、衆就座、行禮喫湯、如旦望。湯罷、供頭鳴鐘三下、住持出、兩序隨出、堂外謝湯、住持止之。衆普同和南。各出全單而散。」如放參鐘、衆同赴諷經。

念誦巡堂之圖

(I・14a)



巡堂、并三八念誦圖、並同。但書帳則甲乙位、以双字名排之。」或曰、西堂頭首后、大衆前排之、大衆依（一）戒次排之、未必論者舊、堂僧不除請假、共書之、如臨時參假掛搭、以朱書之。

十一日 吉書。早晨、大悲咒七返、行道、住持焼香礼拜、消災咒七反、回向畢。」大工小工棟梁、其外番匠、各來就門首待也。大工小工棟梁三人者立也。殘者胡跪。」住持各佛殿前出、大衆隨后。」吉書事始畢、於庫司、自出官寮、出三貫文折紙也。舊規者、拾貫文也。次日中金剛經。大陽和尚無德和尚前日引上。

十五日 祝聖、開山諷經、歸雲諷經、上堂、南禪院半齋

上堂鼓三通也、一通舉、而先兩班谷渡問訊有之。(一〇) 是入僧堂、各坐禪時、二通始到攬鼓磔、而下床、出堂外。庫司之東西相對問訊、一列並、舉法堂也。今代於法堂前、如形礼也。自正面、脇之間入、而東西一列、向法座立問訊。是座前問訊也。次兩列、歸本位立。客頭行者、二通打舉、侍香法座之左邊立。候兩班立班定、轉二鼓時、侍者詣室間、對住持問訊、住持下床問訊、引侍者沙喝出室、望堦、住持一堦登時、行者舉鼓。侍香同登、香合蓋盛瓣香、捧之。住持祝香訖、度侍香。侍香以左手插爐。以右手燒香、自住持一步奧退。一列問訊、住持下堦、侍者都(一〇)合下堦、次下座問訊。

次南禪院半齋。一新兩班、住持有謝語、各脱帽、法語畢下座。住持脱法衣、著平衣、於法堂上間、謝語之礼。但觸礼也。免則問訊、揖而退、各謝詞奈ナキカ故也。詣ニ方丈ニ、則遲キ之心也、即席ニ也。十八日之善月祈禱、百丈忌、同前相觸也。

十六日 土地堂諷經、後醍醐天皇半齋

晚間百丈宿忌 堂司行者、掛諷經牌。報衆小牌式預鳴ス展單、鐘三下、如法鋪設法堂座上、掛真中間、或迎像、安座上、嚴設茶祭筵、上間設(一)禪椅、拂子、橈架法衣、設床榻者非也。下間設椅子、經案、爐瓶香燭、經卷。法座上知客掌之。上間屏風片、禪椅、附座氈、拂子。燒香侍者、掌之。下間屏風片、椅子、附座氈、經案。書狀侍者、掌之。橈架法衣。請客侍者、掌之。法衣 乃用如開山忌、開山衣并所持侍者親接之返之。爐瓶香燭、各一挺。湯藥侍者、掌之。當晚堂司行者、覆住持、并兩序、鳴鐘、衆集於法堂。住持先燒香、侍者捧香合、三拜畢、不収坐具。鳴鼓、獻特為湯、侍者通上、座上侍客、階下持藥、住持右邊侍香、次侍狀、中間侍衣、(一〇)各轉盞、擎置于真前几上、覆位三拜、進爐前、揖湯問訊。又三拜収坐具畢、鳴鼓三下、諷經如恒。一次沙喝諷經。

十七日 早晨取疏銘、張數三枚、廿一行、無印鳴鐘、祖師堂諷經、就于南禪院、後嵯峨院半齋。

次百丈獻粥、次維那上方丈、盛坐牌。堂司行者掛諷經牌。小牌、各具威儀、詣赴就曇華堂。

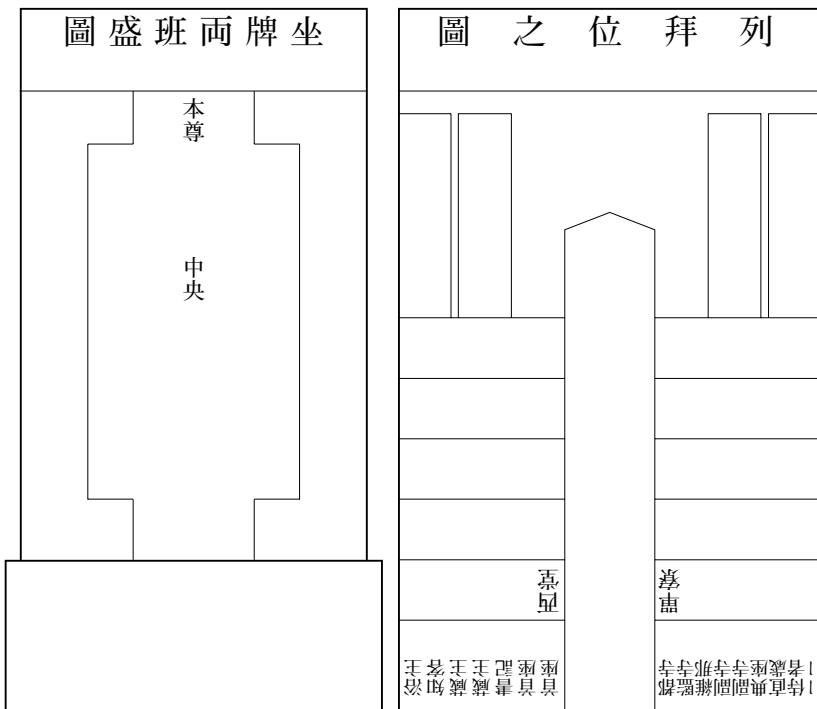
百丈半齋、點供、住持十八拜。次拈香有法語、畢出班各香。次列拜了維那宣日本疏。次舉楞嚴咒小回向。次住持燒香。次大鑑禪師、大悲(一・二〇)咒小回向。次沙喝諷經畢、赴方丈齋。次清水寺懺摩。預鳴鐘。

早晨、住持上香禮拜。上湯上粥、次赴僧堂喫粥畢鳴鐘。赴法堂、住持上香上茶、行者鳴磬、諷經回向、如恒式。

半齋

堂司行者、報衆掛牌、散忌諷經、鳴鐘集衆、向祖排立如圖。住持上香、侍者捧香合。大衆脫帽、住持三拜、不収坐具進爐前、上湯上食、侍者供_レ獻湯_ヲ、同退。就位三拜、仍進前燒香、下颺畢、三拜、収坐具、行者(一・19) 収拜席次行者鳴鼓、特為茶、行者展拜席。住持燒香三拜、上茶三拜、揖三拜、行者鳴鼓三下。「住持拈香、有法語。」行者鳴鉞維那出班、立爐側、行者舉鉞一通。維那問訊、住持燒香、侍者捧香合、歸位。」又舉鉞一通、維那問訊、西堂出班燒香。次前堂都寺、相對出爐前、小問訊、燒香。東序右手、西序左手、一步退而問訊、歸位。」又舉鉞一通、維那

與知客、相對出班燒香、以下兩班効之。各持小香合。二祖、並無借香(一・19)



大衆同展三拜畢、兩序歸位、維那向_レ佛、宣_二日本疏_一、住持展_二坐具三拜、就跪_レ客跪捧爐。燒香侍者、跪捧_レ香合。到住持傳法沙門之處、一拜、以伸供養處一拜、上酬慈蔭處一拜、疏末法孫比丘處一拜、収坐具。」次舉楞嚴咒、前後啓請、脫帽。次大鑑禪師、大悲咒、小回向。」次赴方丈齋 (1・20a) 斯歲大永三年末、正月十七日、當住春庸長老、但馬御下、間、九拜并十八拜、參暇西堂頭、被補之、凡茶湯特為鼓、乃用法堂下間鼓。」或隔宿仍行燈、(1・20b) 鼓鉞、維那執手爐、迎像、當日同送、自東廊下回上西廊歸祖師堂安座。住持大衆、各各合掌。送至了、住持燒香三拜。維那舉大悲咒、回向散。百丈臨濟忌、始末礼同、徒弟院、則開山忌亦同。但畧念誦及疏語。」次行者諷經。

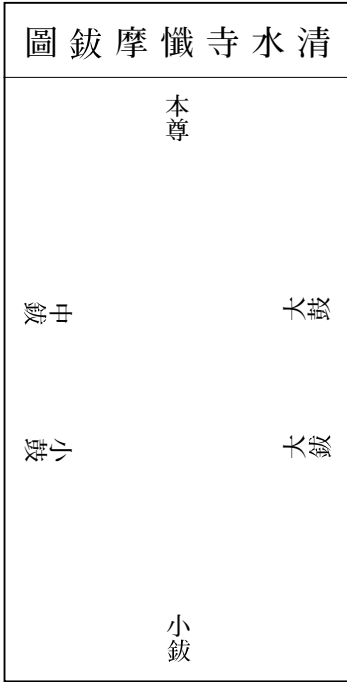
凡日本疏、古者文字不定。瑞雲菴月渚中衫西堂、於双柱和尚前讀樣被定、元來大椿和尚、鎌倉被下、建長圓覺之礼樂、被尋極、畧規被撰畢、日

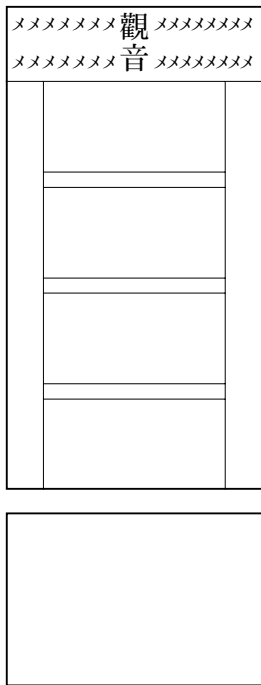
本疏、鎌倉様也。

洪州百丈山懷海禪師者、福州長樂人、卯歲離塵、(c. 716) 唐元和九年、正月十七日、歸寂。」相當日本弘仁五年、壽九十五、長慶元年、敕謚大智禪師、塔曰大寶勝輪。」至大永三年癸未歲、凡八百年歟。

清水寺懺摩 小机三十箇、南陽夙和尚寄進暖席十八疊、常置之清水寺矣

「先前日、以折紙相觸也。每月十七日齋了、赴清水寺、古者於德雲院讀之。雖然末代無斷絕様、任用和尚、寄附常住。故德雲院衆、不加補闕、一超直入也。但亂前宗英藏主、參暇迫而被削籍、后被出頭間、被加補闕云云、依其仁直入、依其仁補欠乎。(I. 216)」





坐牌圖 三十三頁

手爐 法苑云、天人黃瓊說迦葉佛ノ香爐。畧云、前有十六師子白象、於獸ノ頭上、別起蓮華臺、以爲爐。後有師子蹲跪。頂上有九龍、繞承金花、華內有金臺宝子、盛香。佛說法ノ時、常執此爐、比觀今世手爐之製、小有倣法焉。(1・22a)

鈸圖	法鼓	午懺	寺初	東福	觀音畫三十三幅、華三十三、逐一皆飾之
		本尊		大鼓	
小鈸	中鈸			中鼓	
				小鼓	
				大鈸	

囑金引付

拾貫貳百文 布施三十四員分、加佛布施 (I. 231b)

貳百八十六文 西堂七員下物、人別四拾文充。

五百三十六文 平僧廿六員下物、人別廿文充。

百文 導師香華自歸三員、香錢卅二文充。

百文 燭貳挺。

六十四文 茶洗米、炭、内、卅二文、洗米散華土器代、卅二文茶炭代、

柒百文 シテ 導師、加布施

貳百文 香華、加布施

貳百文 維那、加布施

玖拾文 檀持、但亂後、百卅一文、三員二下行之

拾文 鐘撞 (I. 232a)

五文 散華

已上拾貳貫五百文

右從濃州貳拾貫文、月別上御倉奉行、炊飯納之。其内拾貳貫五百文、自寺家請取之。

今代壁書

定 清水寺懺摩諸役者事

一 導師、參暇西堂衆、如先規、可勤之。若有一人、爲不器用者、爲其仁、可倩本衆、首座勤舊、但雖不勤導師、

- 一 滿散燒香者、可爲出世仁、雖背古規、因其才乏、如斯。若於有器用、可爲如舊規事。(1・23b)
 - 一 香華、單寮、以下爲本衆、輪次可勤之。若爲不器用、爲其仁、可雇衆中事。
 - 一 鈸鼓、可爲如先規、雖然於不器用、爲其仁、可雇衆中、但位次者、自他可隨宜事。
- 右條定如件

永正十五年十月 日 堂司

前代壁書

- 一 導師香華、爲代官不可勤、指合有之、可辞退。
- 一 香華、單寮已下、可勤之。
- 一 大鈸、自單寮至後堂、中鈸、書記、小鈸、藏主。(1・24a)
- 一 懺法辭退之仁、十六日、放參已前、可報維那寮、若過尅不可叶。
- 一 十七日不赴仁、可拔衆。
- 一 雖寒天、不可著帽事。
- 一 與隣單、不可笑語事。
- 一 滿散鈸終、而可散事。
- 一 一會不可立事。

右條々先規如斯

凡預懺法衆者、淨三業、整威儀、入道場、肅恭而坐定、鳴鼓鈸三通者、爲使大慈大父尊、補陀洛山(1・24c)紫竹林中、奉迎此道場之故也。鳴三通者、表空无想無願、三大解脫也。不用以憍慢散乱之心。鼓鈸鳴時、赴道場、而

胡語亂道者、非法也。殊不知、懺摩一會終坐禪十息畢者、或収坐具、或不収、走出道場矣。又鳴鼓鉞三通、表奉送大士於舊處儀也。此時殊恭敬低頭、而待鼓鉞之終、而導師出道場者、從後自老宿出也。敢莫以憍慢之心、輕此儀焉。」當磬之役者、須「輕々カルク鳴レ之也。荒打則聲咽、有破損之失」。輕打則響簧、添柔和之聲也。願救三陀羅尼、懺悔段時、從二返之始、著意而可打亂磬、亂磬者、任ニ聲高下打之聲、又從磬高低唱之、緩急者從磬聲也。不明韻律者、莫打亂磬、却妨聲明、短罷各々収念坐禪、數息十息、輕々鳴磬三聲、収坐具退坐。」鼓鉞三通畢、出道場矣。」誦經。止觀云、一人登高座、若唱若誦此經文、餘人諦聽、尋常同音誦普門品。」坐禪。觀音疏云、一嚴淨道場、二作禮、三燒香散花、四繫念、五具楊枝、六請三宝、七誦咒、八披陳、九禮拜、十坐禪。」入定已打鈴、各収坐具而起立。導師回向。回向已時、打磬如恒。繫念數息、端身正心、結跏趺坐、繫念數息、十息爲一念、成就已時起燒香、爲衆ニ生故、三返請上三宝云云。見天台止觀中、尋常法則畧之。」互跪ハ天竺之儀也。謂左右兩膝互跪著地故。釋氏皆右膝、若言胡跪音訛也。長跪ハ則兩膝齊著地、亦先下右膝爲禮。毘奈耶云、尼女體弱、互跪要倒、佛聽長跪云云。天竺九儀之第六也。

二、陀羅尼ニ 矧犀詩引切 跣犀除珍切 貳跣犀。

三、陀羅尼ニ 阿盧禰之引切。

十八日 火德諷經。次勝定院殿半齋。次善月祈禱。「行者預掛祈禱牌。午後、鳴堂前鐘、大眾詣方丈。先住持

燒香、維那舉大悲咒

立始之

次大般ニ若、次觀音經、次消災咒。

次鳴殿鐘、大眾詣仏殿、都寺供茶湯、住

持燒香。預洗米、茶湯、銀錢、經馬等調之。」疏畢后、消災咒三反、讀捨。都寺棄茶湯、行者燎銀錢。

舊規者、鳴堂前鐘、就僧堂、大般若、先大悲咒、後觀音經、消災咒也。」看經間、沙喝點檢有之。次鳴鐘、詣

佛殿滿散。

惟敬云、善月祈禱、自十八日三箇日、就衆寮、轉藏經^二。轉檢者、衆寮之上間出口、調小卷物、置卓上。書僧名、筆硯相隨、大衆自合點^レ出也。方丈看司、維那^(1. 20)看司、兩人立^レ左右^一。證明之、大衆之小卷者、方丈看司、持之歸。滿散者、佛殿也。

略規祈禱章

凡山門有祈禱、庫司稟覆住持、先付意旨。和會維那製疏。堂司行者、報衆掛牌。或一日一座、又三日五日、隨時而行。如諷經之次、就于雲堂看經。則大衆皆從前門入。臨時即從後門入。頭首先於堂前廊廡立。知事入歸位。都寺供茶湯。次堂僧入、歸位。蒙堂單寮西堂、自臘未入、歸鉢位。然後頭首、自班未入、歸位。住持入堂、燒香、據座。維那隨入歸位。未^(1. 21)未就座、行者鳴磬、舉大悲咒、看經隨意經卷。普門品、消災咒畢、回向。若滿散時、回向、至消災咒三遍始、大衆下牀、又回向則至咒終、下床。異說繁多。只記一義。住持出堂、侍者問訊隨出。首座向龕問訊出。次頭首、次第出。西堂耆舊、從上臘次第出堂。大衆各出。

祈禱時、茶湯捨樣、若无都寺、則維那捨茶湯也。消災咒始、而後佛前之茶ヲ、一方之土器^ニ、一ッ^ニ入テ、手^ニ取テ、面へ出テ、サイヲ越テ、三處ニ捨也。先左、次右、次中。於殿前燒疏也。^(1. 21)

惟敬云、僧堂祈禱之看經。首座者。首座牀、又已下之頭首者、如恒。后堂者、后堂牀、西堂者、西堂牀、如鉢之圖、各坐牀。都寺已下、侍者、外僧堂也。維那一人者、入口西堂之牀之頭、立椅子、看經始之。^(1. 22)

請楞嚴頭

當寺楞嚴頭、每歲斯日、就龍雲寺、御成之時、大高(1. 30a)檀紙一重、折紙、而口者楞嚴頭書也。某喝食、某喝食、兩人書立、而本請喝食、一番書也。奧書者是可然謂儀也。某仁報案内書也。

喝食、楞嚴頭、同前、口者喝食楞嚴頭書也。如僧楞嚴頭、兩人書也。

惟敬云、右維那時、僧之楞嚴頭者、今上方超華和尚、喝食之楞嚴頭者、聽松靈翰喝食有麟也。寺之維那、正月廿八日、就龍雲寺御成時、先往而待御成也。其間御前請伴給仕、各請伴、喫點心也。蔭涼瑞西堂被來、而被披露其主ニ、則御髮搔カウガヒニテ、(1. 30b)御點合也。維那請取歸。今時者、而蔭涼江上也。堅被辭其人體未定、而延引時者、二月十二日、德雲院御成之時、御點被申也。

惟敬云、當寺楞嚴頭、小維那、重物之事、舊者紅梅之紗縫物也。是又惟敬紀綱時、二月十二日、就德雲院御成、維那被召寄、以瑞西堂、從今已後者、畧紅梅之紗可爲。旨、被仰出也。

二月

八日 早旦、先取疏銘。 次鳴鐘、早晨。 次大帝誕生。 晚間念誦。(1. 30a)

誕生式 大帝誕生、看經。「舊規者、殿内敷疊、讀大乘經、修多羅藏經等也。」座牌者、推經之上。「今時者、先大悲咒、次金剛經、次普門品、消災咒。次鳴鐘、滿散、預出班燒香、借香問訊有之。滿散楞嚴咒畢、消災咒三反。行者燒銀錢、都寺棄茶湯、行者供具、洗米茶湯、如例營辦之。張看經榜借香規式、見土地ノ念誦ニ

略規

先期、堂司點檢現在僧簿、依戒次、各以双字名、書坐牌。隔宿、於土地堂、貼看經榜。詞在別至日、庫司排祭供、香燭茶湯經馬等、堂司行者、土地堂鋪設。依(1. 30c)位安坐牌。粥后、掛牌報衆。臨齋、鳴僧堂前鐘。衆

集、依位看經畢、又鳴鐘。大眾立定、兩序歸位。維那出、揖班上香。唯依元位。無向內立。轉身借香問訊訖、滿散諷經畢、宣疏。詞在別。或押印、不知有據

廣德軍祠山張大帝、初發靈時、嘗爲化猪、以治水。故郡人、多不食猪肉。爲諱物、郡人事之甚謹、戒不食猪肉。唐士羅隱、名彰天下、所至之處、鬼神無不爲之譏諷。嘗過其廟、題詩於壁曰、踏盡天涯路、平生不信邪。方欲題后二句、俄手如入拽起伏、聞人語曰、若後二句不佳、能折你手。羅悚懼曰、如不佳（一·324）甘照神語、手遂如故。續題曰、祠山張大帝、天下鬼神、爺。湖海新聞夷堅續志后集卷之七。

看經榜

山門 二月初八日恭遇 當寺護法、祠山正順昭顯威德聖烈大帝聖誕良辰、謹集合山大衆、肅詣靈祠、看誦大乘經典、聊伸慶讚之誠。仰答 匡扶之德者也。 粵以、戒稟婦宝、僧夏預堂前單鉢位。廟居廣德、詩仙稱天下鬼神爺、朝誦法華、六萬餘言、功闢隋河、幾千百里、方仲春葦敷八葉。應昌期靈降九天。陰兵肅衛鐵騎雲屯、在在作（一·316）伽藍之主。聖烈尊嚴玉爐香謁、堂堂現居士之身。摧邪去惡雷擊霆奔。翊正扶公波騰岳立。爰自建長年、東臨日域、宏恢少室心宗、始知大宋國西有祠山、夙秉驚峰口囑、禱兮如鴻鐘答杵、昭然若寶鏡當臺、背忘恩義之者先誅、侵盜常住之人、重罰。今此海衆、同披梵典、仰謝悃悃、未來劫數、確護禪林益堅城斬。謹榜。

太歲干支 年二月 日 山門榜

十五日 仏涅槃。 粥罷、住持於殿裏拈香、巡堂炷香。」次祝聖諷經。 次開山諷經。 歸雲諷經。 次（一·325）詣

方丈、取疏銘。張數三枚、二十三行 次出列拜圖。 數殿前、掛諷經牌。 小牌各具威儀、詣金剛王寶殿 次鳴衆寮板、大眾坐堂。 次行者

鳴鼓、三通上。 次同列殿上、向佛排立。 次參頭展拜席、住持十八拜。持手爐 次出班燒香、兩序各香。 次列拜畢、兩序問訊、歸位立。 次維那宣日本疏。 次楞嚴咒。」次沙喝諷經。」散鐘時、皆向佛立。

半齋式

住持入殿裏、則大眾脫帽、前啓請、舉南无本師、皆脫帽

先期、堂司書列拜圖、分付行者、隔宿鋪設于殿前。

行事、同前

庫司營供養。至日粥罷、住持於殿裏拈香、(ニ・三三)祝聖

畢、開山諷經。然後鳴衆寮板、大眾坐堂。行者鳴鼓。上堂祝香。少異 跌坐說法竟。下座。領衆同列殿上、向佛排

立定、住持上香三拜。不取坐具 進前上湯上食、請客侍者通上、燒香侍者、捧置于机畢。復位三拜。再進前、上香下

嚙點茶、又三拜、取坐具、行者取拜席 然後行者鳴特為茶鼓、次展拜席、住持燒香、上茶三拜、揖三拜、行者鳴鼓三下。「次

出班燒香、兩序各香、行者鳴鈸、維那出班、立爐側、行者舉鈸一通、維那問訊。住持燒香歸位。又舉鈸一通、維

那問訊、西堂燒香、次舉鈸一通、前堂都寺、(ニ・三三)相對出爐前先小問訊燒香、東序右手、西序左手、一步退問訊、

歸位。次舉鈸一通、維那問訊、與知客相對出、燒香以下、兩班有之、則效之、各持小香合。

次列拜畢、兩序問訊如恒。歸位立。「維那向佛、宣日本疏、住持展坐具、就跪知客跪、進手爐、燒香侍者跪捧

香合。到住持傳法沙門、法孫比丘、一拜、到以伸供養處一拜、到上酬慈蔭處一拜、到疏末法孫比丘處一拜、収

坐具。」半齋。

右九拜、十八拜、住持懈怠時、前堂首座補之。後堂者不可補之、然則疏初末、可書某山某寺、頭首比(ニ・三三)丘

某甲也。書首座諱、展坐具、則下問脇江少依。而可展之。

今代無前堂、則參暇西堂、九拜十八拜、補之。

九拜十八拜、大眾脫帽、今代被著帽、隨意也。(一・三九)

文龜二年壬戌、佛涅槃、住持琴叔和尚、依懈怠、前板德雲院德寅首座、有九拜十八拜、不持手爐、疏前之燒香無之。半齋、五段燒香有之。」住持拜席、展卷、參頭、副參、望參、司_レ之。」舊規者、列拜圖、中_カ書_キ之用_ニ、中紙一帖、杉原一帖、自_二上副寺_一出之。

佛涅槃 傳燈云、世尊至拘尸那城告諸大眾。吾今背痛欲入涅槃。即往熙蓮河側娑羅雙樹下、右脇累足泊然宴寂。復從棺起爲母說法。特示雙足化_レ婆耆_一。并說無常偈曰、諸行無常、是生滅法、生滅滅已、寂滅爲樂。時諸弟子、即以香薪競荼毘之。燼_(ニ・三)後金棺如故。爾時大眾即於佛前以偈讚曰、凡俗諸猛熾、何能致火爇。請_レ尊_レ三昧_一、闍維金色身。爾時金棺從坐而舉。高七多羅樹、往反空中、化火三昧。須臾灰生得舍利八斛四斗。即穆王五十二年、壬申歲二月十五日也。」自_二世尊滅_レ後_一、一千一十七年_ニ。教_レ至_レ中夏_一。即後漢永平十年、戊辰歲也。至當年大永三癸未歲、而滅後二千四百七十三年也。

十八日 火德諷經、半齋曇華堂

勝定院殿

函丈懺摩。

無念誦、放參。

懺摩式 三期、二月十八日、六之十八日、十二之_(ニ・三)十八日、是也。懺法定衆、十員也。」至_レ日、午後出差定、掛殿前。次鳴鐘詣方丈、導師香華者、維那以行者、兼日雇之。請帳記焉。依爲住持祈禱。」古者自方丈、擇仁、被雇之。故維那書榜時、乞懺摩請帳、榜之裏被書之。或參假西堂中、或山中人品、被請也。」開山賞翫之意_ニ、自_二兩祖塔_一、維那衆一人充、請之。今時非維那才、以懇望被題事。古無其例、梅莊和尚傳語、伯封清規寫之。

(1. 36a)

壁書

掟

不勤禪客、以十緡官錢、轉位事、於以後、令停止之。萬一強而有競望輩者、如舊規、以貳拾緡官錢、可被免者也。仍衆評如件。

永正十二季六月 日

維那良甫

前任

西堂

侍衣真桂

前任

西堂

都寺瑞鐵

舊規者、今日前堂草飯有之。後堂草飯不定。自今日、諸堂柱、貼我今灌沐。維那每日、於鎖春亭^一、沙喝^二 (U・38a) 我今灌沐教之。又自斯日、西淨并諸寮、涼簾掛也。九月晦日、取置之。又自其日、掛暖簾。自斯日、從侍香寮、給仕之小僧喝食、倩焉。故人品來、終日酒宴、侍香共雇之。

晚間歸雲宿忌

先當寮看司、扱衣而盆打數相調、至歸雲、迎取御影。次展單鐘三下、次鳴宿忌鐘、集大眾。住持九拜有之。九

拜、行者先展拜席、住持展坐具、燒香三拜

不取坐具

行者鳴鼓、上湯三拜、又進爐前、揖歸拜席三拜

取坐具 鳴鼓

三下、諷經。書院上下 (U・38b) 間、如百丈忌、飾之。次沙喝諷經有之。

二日 住持詣法堂、供湯粥畢。次入僧堂粥食、次土地堂諷經。次赴祖堂、住持燒香、供茶湯^{三拜} 次獻粥。次

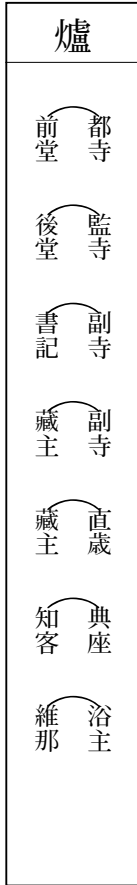
維那方丈舉、盛坐牌^一。次鳴半齋鐘、集大眾。次行者展拜席、住持十八拜。次出班燒香、兩序各香。次列

拜。次舉楞嚴咒。今時不赴塔下 次沙喝諷經。次赴方丈齋。

古者、住持赴僧堂之粥。先詣法堂、供湯粥、入僧堂。粥食訖、鳴鐘諷經。外僧堂、水桶手中、置調之。大眾洗

口。」次就法堂、住持燒香、供茶湯。」維那舉獻粥(一七〇)半齋。鳴鐘集衆、行者展拜席。住持展坐具、燒香三拜不取坐具。上湯上食三拜、下嚙三拜收坐具。行者收拜席。鳴特為茶鼓、行者展拜席、住持燒香三拜。上茶三拜、揖三拜、行者鳴鼓三下畢。

出班燒香。行者鳴鈸、維那出班、立爐側。行者舉鈸一通、維那正面、一低頭小問訊。住持燒香歸位。又舉鈸一通、維那低頭問訊、西堂燒香歸位。又舉鈸、前堂舉都寺、出爐前、小問訊、燒香、東序右手、西序左手、一步退問訊歸位。又舉鈸一通、維那低頭小問訊、與知客、相對出、先爐前小問訊、燒香、東右(一七〇)手西左手、一步退問訊、歸位。以下兩班、効之。次列拜畢、兩班歸位。」維那舉楞嚴咒、如恒舊規者、大悲咒。赴方丈齋。赴塔下楞嚴咒。



八日 佛誕生 粥罷、堂司掛牌、報衆。次維那詣方丈、取疏銘無印。次鳴鼓二通、住持上堂、祝香、次十八

拜、次出班燒香、兩序各香。次列拜。次維那宣疏畢。次我今灌沐。次舉南無本師、半齋畢。」次沙喝諷經向佛排立

次起浴主湯(一七二)先期、堂司書浴佛偈、四月朔、五更鐘鳴、堂司行者貼諸堂柱。」又預書列拜圖、隔宿、并翌旦、鋪設于殿前。至日、粥罷、堂司

行者、掛牌報衆。小牌開鐘聲、各具威儀、詣大佛寶殿。又浴佛偈板、從四月朔旦、掛殿裡柱。庫司嚴設華亭見規。鼓二通、住持上堂、

祝香云、佛誕令辰、某寺住持、遺教遠孫比丘某甲、虔爇宝香、供養本師釋迦如來大和尚、上酬慈蔭、所冀、法界

衆生、念念諸佛、出現于世。次二跌坐、垂語、問答罷云、四月八日、恭遇本師釋迦如來大和尚、降誕令辰、率

比丘衆、嚴備香華燈燭、茶(ニ・ヒ)果珍羞、以伸供養、住持遣教遠孫比丘某甲陞于此座、舉唱宗乘、所集殊勛、上酌慈蔭、下與法界衆生、同伸希有之慶。次說法畢。白云、下座、各具威儀、詣大佛殿。浴佛諷經、謹白。

半齋

下座、領衆、同列殿上、向佛排立定、住持上香三拜、不取坐具進前上湯上食、請客侍者通上、燒香侍者、捧置于几畢、覆位三拜、再進前、上香、下嚬、點茶又三拜、取坐具行者鳴鈸、維那揖班上香、先住持、次西堂一班、用小瓣香、次西序、無借香問訊也。堂(ニ・ヒ)司行者、鳴乎磬、大衆展拜。然後兩序歸位立。大衆如恒立。」維那向佛宣日本疏、住持跪爐。先有三拜、法孫比丘之時、一拜、以伸供養之時、一拜、上酌慈蔭時一拜。又疏末之太歲之時、取坐具立定。比丘某甲疏之時、問訊。行者鳴磬。」又跪爐之時、知客進手爐、侍者捧香合。」疏語具敕修、復位舉唱。次第三行道浴佛諷經回向。見于規。大衆、赴浴主湯。

大鑑清規云、佛誕生、成道、涅槃、斯日、住持若他緣者、兩班有出班燒香、此山門公界礼也。首座居偏跪爐、堂司行者進手爐、聖僧侍者進香合。方丈侍(ニ・ヒ)者亦得。維那立宣疏不須跪。三佛二祖、疏內、無住持、則頭首比丘某甲書之。傳法故也。孟蘭盆歲末、無住持、則知事僧某書之、代山門故也。

入浴

入浴次第、不論請假、並皆書之。西堂、東西單寮、大勤舊、三通、各一人充排之、其外蒙堂同前。堂僧、依戒次二排之。圓覺・淨智二寺、用此式。」建長入浴次第、不書山門、書差定、第一通、西堂一班排之、第二通、頭首如常、第三通、住持侍香、并知事一班排之。以白紙書之、橫計八段二分之二。聖僧并住持、首座、名字、(ニ・ヒ)貼朱紙書之。又知浴比丘某撥。僧堂前、下間第一柱諷經牌、第二點湯、第三開浴、第四入浴、次第排之、一名混堂、一名錢堂、一名浴室。(一・四三六)

山門

浴室圖

某山某寺 入浴次第

右具在前 今日日 知浴比丘某甲 白	堂頭和尚 侍者	第二通 第三通	首座 知客	第一通 第二通	文珠大士 典座	第一通 第二通	都寺 直歲	監寺 聖僧侍者 維那 西堂 副寺
	侍者		首座		都寺			
	侍者		書記		監寺			
	侍者		藏主		維那			
	侍者		藏主		副寺			

圓覺・淨智二、黑漆板、用粉書之。橫豎計、以白紙分之。至日、粥罷、僧堂前、下間於第四柱、掛之。」或曰、白字、住持如它緣、則時改白、書撥。」古者新掛搭、自下間入浴、古掛搭、衆者、自上間入、喝食不縛髮、入浴。先期、知浴依合山僧簿位次、書入浴次第、至日、粥罷浴室行者、報衆、掛點湯牌。小牌式 知浴比耳葉、右邊點湯字下貼之 并入浴次第、於僧堂前下間、諷經罷、鳴點湯鼓、浴主先至、外堂上間、向下間立、大衆自淺臘而入。入則對浴主問訊、頭首一班、堂外廊、於下間立、知事一班入、對浴主問訊。歸鉢位立。次頭首、自（一）班末入、知客先入、歸首座板、後堂前堂首座入室、歸位立。浴主轉身、於下間立。供頭緩鳴堂前鐘七下住持入、與浴主問訊歸位。浴主隨入中立問訊、大衆坐定。行礼與且望侍者礼同。但至住持面前、揖香揖湯、問訊、可有之。

佛降誕事

藏經箱、千字文書之者、釋氏通鑑二詳也。」浴佛像之事者、藏經之傷字箱、浴佛功德經詳也。」柄杓二置之事者、九龍吐レ水、浴レ太子謂也。先往者レ、先之柄杓、後往者、後柄杓、相對レ而舉レ心也。」花堂者、謂花亭（一）也。傳燈云、周昭王二十四年甲寅、四月八日中天竺國淨飯王妃摩耶氏、生太子悉達多、三十五歲、於菩提場中、成無上道。號佛世尊、於周穆王五十二年、二月十五日、於拘尸羅沙羅羅雙樹間、入涅槃。

大惠禪師上堂云云

周記云、昭王二十五年癸丑、七月十五日、釋迦入摩耶胎內。同昭王二十六年甲寅、四月八日誕生矣。」又周異記、昭王即位二十六年甲寅、四月八日江河泉池、忽然汎漲、井水溢出、宮殿山川震動、昭（一）王即問太史蘇由、是何祥耶。由答云、有大聖人、生於西方、故現此瑞。昭王曰、於天下如何。由云、即時、無他。至二千年外、一聲教被此土。即鑄石記焉。埋於南郊天祠前。」周穆王即位、五十二年壬申之歲、二月十五日旦。暴風忽起、西方有白虹十二道。王問太史扈多曰、是何徵乎。扈多奏曰、西方有聖人。彼大聖人滅度、思相所現而已矣。釋靈年代

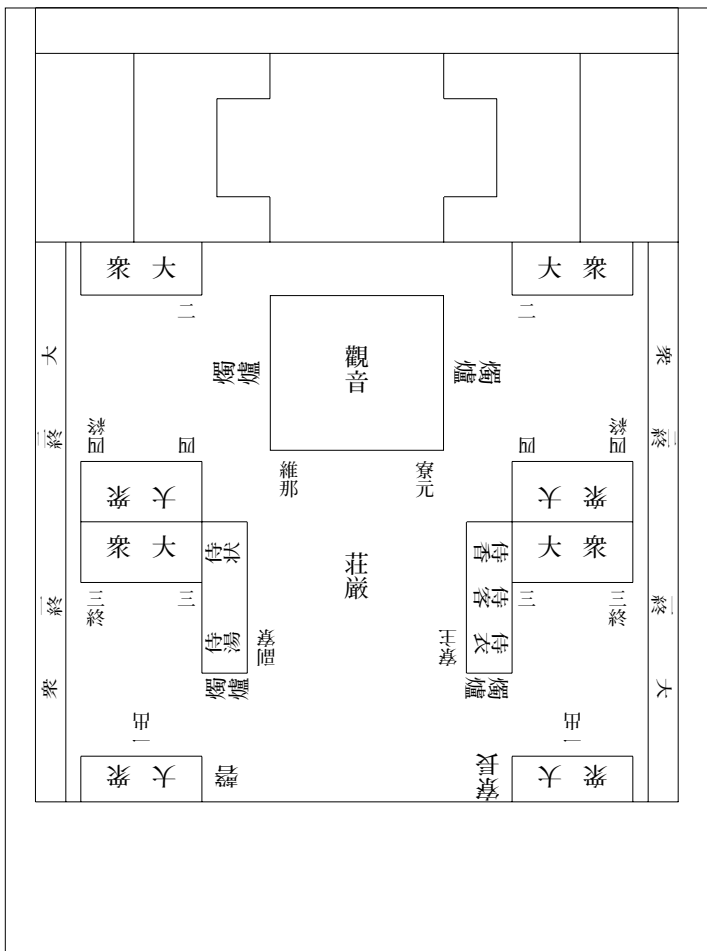
記曰、二十四年甲寅、佛誕生云々。佛性論云、釋迦四月八日夜半、明星出時生、身長一丈六尺、父淨飯、母摩耶也。因果經云、摩耶夫人、十月滿足、於四月八日、明(ニ・ホ)星初出時、從右脇而出太子。身金色而三十二相、放大光明、普照三千大千世界。時四天王、即以天繪、接太子身、置宝几上、釋提桓因執寶蓋、大梵天主持レ白拂、立レ左右。難陀龍王、優波離陀龍王、於虛空中、吐清淨水。一温一涼、灌太子身。」周記云、穆王四年壬午、佛出家、二十九年戊子、成道、五十四年壬申入滅、年七十九。文選頭陀寺碑文曰、周莊王七年、佛誕生。僧史畧上卷云、有七說、一夏ノ末、二商ノ末、三周昭王、四平王、五桓王、六莊王、七貞定王時等云、内外教、二說不同。」費長房開皇錄曰、莊(ニ・ホ)王時出云、以支干勘之、則周莊王十一年戊子、三月十五日成道。定王十八年壬寅、入滅七十九。日本神武天皇、七十年壬寅也。此說符合于玄奘三藏謂戒賢論師之年記也。

十三日 早晨 午後、衆寮諷經、預出楞嚴會圖。」諷經者寮主始之。舊規立功取也。亂後惟清・竺關・瑤林等寮元時如斯。」寮外下間方、揖入問訊有之。」本尊觀音、以打數水引、華屏供具爐燭等、飾之。」大衆兩班、入寮畢。如恒立班、住持燒香畢、寮主入口之唐戸間之脇立。」行者鳴磬、始楞嚴咒、如常行道、至(ニ・ホ)五段、住持燒香礼拜畢、都寺之頭ラニ、往テ而立。行者卷席。次寮元、自知客之末班、出中央、問訊燒香、大展三拜退、無拜席。爲我寮主故、中央拜也。寮主回向畢。

結制寮元須知 衆寮十三日湯

至期、進行瓶盞人湯、上間出入板對面位、位聖龕（ニ・モ）爲座頭、緩聲連打板、揖衆入、寮主副寮、立戶外上間問訊、衆入畢、寮主副寮、轉身立下間。揖寮元維那入、先維那後寮元。寮元光伴。大衆各立座前、主副進寮元維那前問訊。逐次到各曲糸前問訊。到第一處、第二處、第三處問訊、收問訊、從舊路回、到第四第五第六處問訊。又收問訊、經舊路、不可抹過礼末之牀、與爐間、第七第八、乃至十四處非兩板頭、收問訊、到十六處問訊畢。歸中央、問訊立。寮元光伴。大衆皆就座。兩人到佛前爐、燒香、到第二第三第四爐、燒香畢。收香合、進寮元維那前、問訊。（ニ・モ）次到光伴各處。問訊、一處至十四處、收問訊、如前歸中央問訊、而由戶邊立、望寮鳴板一下、以盞入。又鳴板一下出、又鳴板一下、行餅入入。又鳴板一下出。寮元光伴大衆、揖而喫湯、待各喫了、進寮元維那前、問訊、退七八步、展坐具三拜不炷香。收坐具、到各曲糸前。次第問訊、次到第一處、亦如前到十四處。歸中央、問訊而出戶外。鳴板下、盞人二人、進寮元光伴前、下盞、寮元維那、下曲糸、小揖、出戶外、先維那、後寮元、立上間謝湯、進而又揖而退、兩人又進中央、小問訊。燒光伴香、退而問訊而出。（ニ・モ）大衆下座。鳴板連打三下。」又鳴板、如接衆之時、寮元自接頭首大衆畢。立戶外、候住持至、問訊、歸班。諷經行道畢、住持礼拜收坐具。赴都寺上肩立、寮元在聖僧牀邊。候住持收坐具、而立定。進爐前、燒香、少依下間展拜、而歸班。聞回向畢。寮元從下間戶出。住持出問訊而謝也。

(1・49a)

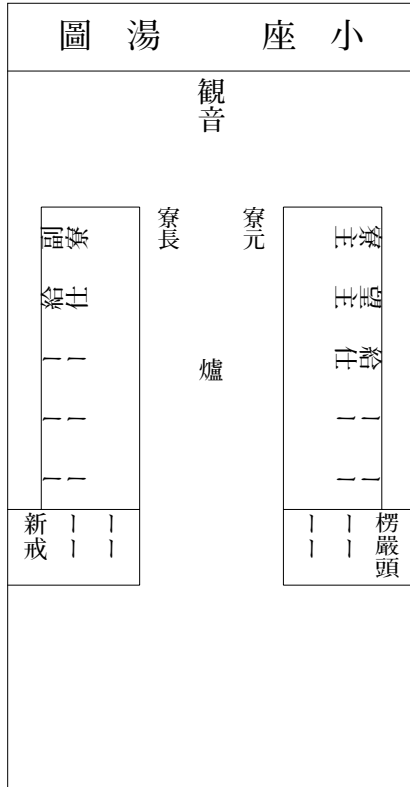


衆寮特為大衆湯圖

(1・49a)

照牌式、寮元與維那分手、寮元上、維那下間西穿床排之。」侍香侍客侍衣、上間排之。侍狀侍湯、下間排之。」寮長已下、前資上坐、依戒次、四案排之。不排知事名、寮長則以上坐高臘、充之今時寮元、若後堂勤舊、則寮長乃書記勤舊、寮元書記、則寮長乃藏主、寮元藏主、則寮長乃藏主、侍香亦可也。(1: 50a)

大衆湯已前、照牌圖、椿大春爲之出圖也。



斯日楞嚴頭出仕、則合衆寮諷經事。頭首禪客、自今日著新衣。」度僧人上名、結制^二者、今月十三日、衆寮諷經畢、舉也。歲節^三者、除夜開山諷經畢、袂衣而(1: 50b)舉也。解夏同前。冬至者、前日開山諷經畢、舉也。」參堂見于古規。」寮元限一回、七月晦日、至維那寮、報退、維那請新寮元。

十四日 啓建粥罷、行者掛牌報衆。 小牌、各具威儀。詣金剛王寶殿。啓建楞嚴勝會。 維那詣方丈、取疏銘。

紙數五枚、九十五行。初紙十六行、次二枚、二十一行、次四枚目著、二十一行、終七行。

次出楞嚴會圖。鳴鐘大衆依圖排立。次鳴方丈板、住持出、次鳴庫司大板三下。次鳴大鐘、及諸法器、維那巡廊炷香、次與楞嚴頭、對立、次住持炷香歸位。次行者鳴鈸、出班上香、各香、西堂不被(一・三)出、無借香問訊。次維那歸位、向佛宣疏。次鳴磬、楞嚴頭、舉啓請唱佛母。次維那、不赴行道、三段時燒香。次咒畢、維那舉後啓請了、次回向散。次喝食楞嚴會。次戒臘牌、三處掛之。

晚間、土地堂念誦、行者掛牌。次鳴巡廊板、與三八同。次大衆集大殿排立。住持巡廊、次大殿炷香、行者鳴磬。住持禮拜、預鳴磬三下、又每拜三下。次卷席、住持合掌、大衆同。次住持至時、大衆俛首合掌。次侍者隨後、叉手過。次住持、至土地堂、炷香、大衆雁立、鳴鈸出班。借香、謝香。次維那、唱念(一・五)誦、次十佛名了、回向。神名段、都寺捨茶湯、回向、暗誦之

次大茶湯、就僧堂講禮。

次赴祖堂、都寺供茶湯、住持燒香。一天授。次歸雲調經、

次小參、次方丈點湯。次無言習。

先ツ曉住持入僧堂、新戒隨住持之後、而入僧堂、展坐具聖僧前三拜。而摺坐具、至住持之前、問訊舊式、規。次至燒香侍者寮、并維那寮也。客頭行者引之。牀曆僧籍等書名字時、維那國戒問畢、同楞嚴會圖書之。次取疏銘、推三三印三。楞嚴會(一・三)圖鈸打數、三具足大中磬、出之。營辦供具洗米、燈燭銀錢等也。有楞嚴頭、則當寮之入口三、曲衆用意而置之。(一・三)

先鳴大鐘、堂前殿鐘、大衆依圖排立、維那自衆寮僧堂始、而持大香合、山門、韋駄天、土地堂、祖師堂、普庵、火德本尊、檀那。次中央、燒香、而香合置元處、楞嚴頭相對問訊入殿裏對立住持至佛前燒香上茶湯終、而歸位立、維那楞嚴頭、相對問訊、向佛立也。

上班燒香

斯日西堂者、不被出、住持兩班計也。各兩班、持小香合、行者鳴鈸時、維那進爐左邊、揖住持、燒香侍者相隨、燒香畢、歸位時、又舉鈸、維那正面問訊、不(ト・53)レ可レ以手搖シテ、揖兩邊肩、前堂與都寺、相對進爐前、先小問訊、炷香、一步退問訊、歸位時、又舉鈸。維那正面問訊、與知客相對燒香、轉右歸位。」維那向佛讚疏。預有嘆佛偈。疏畢、即行者鳴磬、楞嚴頭、舉啓請。衆和南畢、唱佛母、念經首、不移行道、至三之段。維那進殿裏、諸爐炷香、歸位。咒畢、楞嚴頭唱後啓請。衆和畢、維那回向、大衆散。

燒香次第

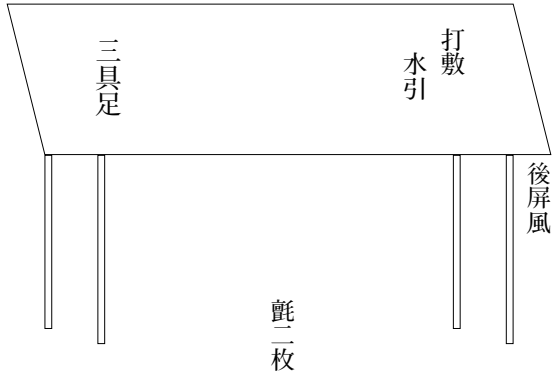


戒臘牌 (I・54b)

堂司、寮元、侍香、預依戒臘寫造。」至斯日、十四日午後、堂司、牌掛僧堂前上間、寮元、牌掛衆寮前、侍司、牌掛法堂下間。各備香几燭爐、供養大衆、住持炷香展拜、頭首禪客展拜、衆各同前畢、各收牌。而掛起本寮。」但寮元牌者、十三日、衆寮諷經掛之。不下也不書知事之名梅檀林無雜樹薈蒿林無餘香謂也。」今時戒臘牌、法堂上間出之、大衆拜之、甌二枚、出之敷也。(I・54b)

戒臘牌之圖

一										九八							
浴主	知客	藏主	書記	首座	堂頭	和尙	文珠	大士	威音	王戒	都寺	監寺	維那	副寺	直歲	一	一
二										三							
五										四							
六										七							
州府六十餘人事			銀紙		造物				銀紙		闔山七百員清衆						
										鏡		月					



喝食楞嚴會有之、小維那、楞嚴頭、相對入問訊。規式、如僧楞嚴頭也、沙彌頭、燒香「滿散、小維那宣」(U・52a)疏。楞嚴會別書焉。

土地堂念誦

午後、土地堂嚴設供養、排經馬、香燭臺几爐瓶。」堂司行者、報衆、排念誦牌。小牌「土地堂。巡廊鳴板、與三八同。先方丈、次巡廊。」衆集大殿、相對雁立。住持、先祖堂燒香、次大殿、炷香三拜、行者鳴磬。又鳴大板三下、次鳴大鐘、住持至、大衆俛首合掌、爲迎住持、侍者隨後。只當叉手而過。」燒香侍者、東兩班立處立。沙喝、西兩班立處立。東西序者立班、住持至土地堂前、燒香歸位。(U・52b)

出班借香

凡土地堂、四節念誦、出班、但依元位立、無向內立。行者鳴鈸、維那出位、於香爐左側立、侍香出位、立住持後。行者舉鈸時、維那但正面、一低頭問訊、住持炷香、侍者捧香合。住持歸位、侍香香合蓋內、分香木、左右置之歸都寺上之位。次舉鈸時、維那正面問訊。都寺與前堂、相對炷香、先進住持前、借香問訊。進爐前、小問訊、燒香。東序右手、西序左手、一步退問訊。即收問訊。又至住持前、謝香問訊、歸位。次舉鈸時、維那正面問訊、知客直歲、三人相對問訊、訊、炷香、維那中也。如前三人共、至住持面前、借香問訊。次進佛前小問訊、取香合之香木、三人同燒之一步退、小問訊。又至住持面前、三人同謝香問訊、各歸位。」即維那、向土地堂、舉念誦、十佛名畢、先向本位。聽又如前向土地堂、舉回向。」古者回向袖裏之、今時者、暗誦之。」回向畢、則鳴鼓二通、衆歸堂赴湯。四節茶禮並同。具備用規。

借香次第

爐

都寺
前堂

監寺
後堂

副寺
書記

副寺
藏主

直歲
藏主

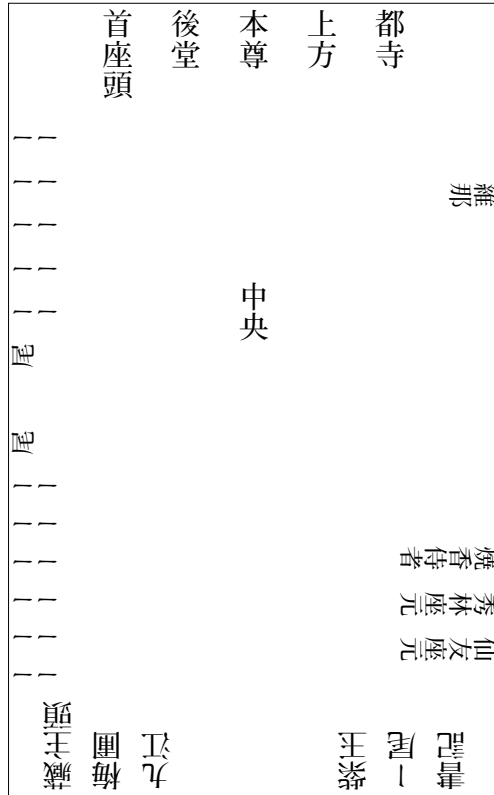
典座
知客

浴主
維那

沙喝點檢 (I. 566)

凡四節、土地堂念誦畢、大眾赴開山塔諷經。」次赴歸雲諷經。」沙喝者、自天授、直至山門、東頰南頭、向西立、有當官、而定沙喝之高低、一番之沙彌者、上間頭、二番沙彌者、下間之頭也。山門東頰北頭、向西立。下間者、南頭一人隔分上下間隔山門香爐立班也。」有點檢、則引合上下間、依其罪、或削籍。交代之、當官免許之。則前代之當官屈之、不然則出仕不_レ叶、免則呼出法也。上間沙彌頭、下間小維那持之。官退時、次當官渡之。上下間經讀喝食、五人充定之、免諸役也。其一節間、上下間、隨意不立也。」(I. 566) 鈴番者、限五箇日。番畢、則施餓鬼過、而籠頭之蟠、洒水器、鈴輪番之簡、持僕渡_レ次_二也。簡之字、面者、輪次鈴番。裏者、終而復始。若施食入夜、則上副寺寮、乞_レ燭點、施食僧一分也。(I. 572)

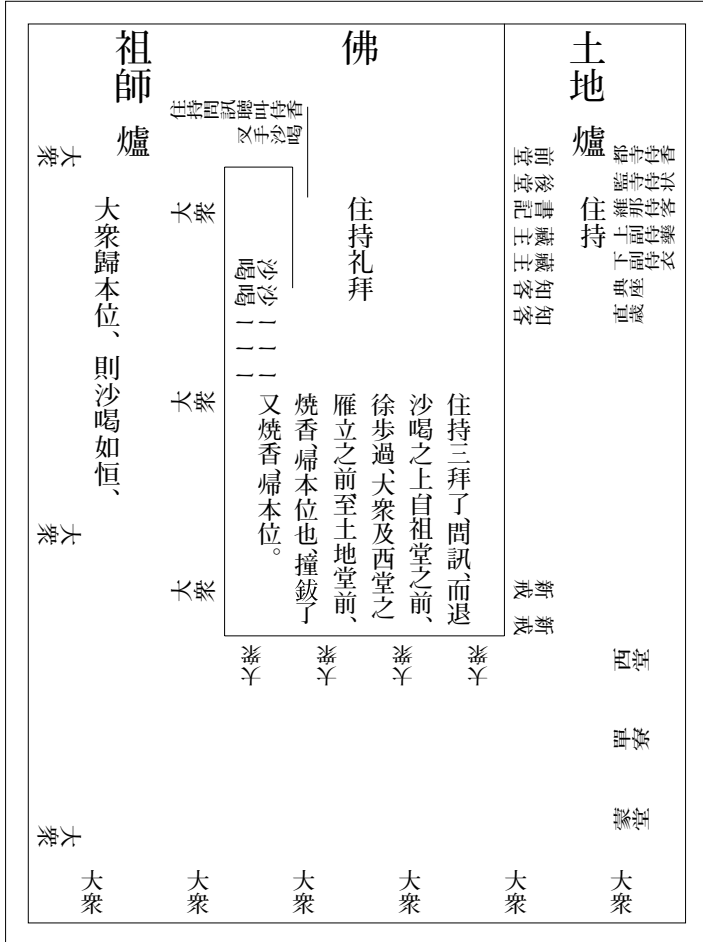
大永三年癸未



土地堂念誦圖

東漸和尚出斯圖 (1・58a)

沙喝對向東
序位、五侍主
班此圖朕之、



庫司特為首座大眾湯

念誦罷、就僧堂講礼、都寺預於齋退、具湯榜。具規 即令本寮茶頭行者、備拌楸燈燭、詣前堂首座寮、挿香、觸礼一拜。稟云、詞見規 以榜呈納首座、或都寺、直付供頭、隨合茶頭、遞付供頭、貼僧堂前下間。「都寺懷香詣方丈、觸礼一拜、請詞見規 午後、掛點湯牌。僧堂前、列照牌。今時不掛照牌 首座、與住持對面位、上下間、安大眾位。」念誦畢即鳴齋鼓一通、大眾歸鉢位、頭首一班、問訊、入堂。見歲節、特為茶礼 都寺隨入、揖首座離位、却揖以次、頭首、進板首、(一〇〇) 隨送首座歸位。從聖僧後、右出堂外、迎住持入堂、供頭緩鳴堂前鐘七下、送住持入位。「仍往首座揖坐、仍如前出、從首座板起、巡堂一匝、外堂上下間、歸堂、中立問訊、衆坐。」進前燒香、次上間下間、外堂、歸即往首座前、問訊、仍巡問訊一匝、及外堂、歸堂、中間訊、側立。聖僧板頭立 鳴鐘二下、先進首座與住持齋。次行衆齋。又瓶出後、都寺往首座前問訊、右出聖僧前、大展三拜。仍巡堂一匝、出外堂、引全班入、住持前、兩展觸礼畢、轉身引聖僧後、轉右出堂前、上間排立、首座隨出、對觸礼一拜。謝湯、徑出(一〇〇) 外廊、待諸頭首出、同赴開山塔諷經。都寺復歸堂中、炷光伴香、而退。鳴鼓三下、大眾還坐、與歲節茶礼少異、知事一班、觸礼出。住持隨出、觸礼一拜徑歸方丈。又首座送知事出、對觸礼一拜、云云。」是皆與諸規別也。今世藥石無、故皆共出歟。

方丈預出免人事榜 貼堂前上間

某節、並就來日二、法堂上三人事例免到方丈。伏希、衆悉 住山某甲咨白、右敕修清規之礼也。

來日結制、解制冬至歲節、

陞堂罷、普觸礼三拜人事、並免到方丈。伏希(一〇〇) 衆悉。住山某甲咨稟。右載澤山清規。

開山諷經

先赴天授菴。次赴歸雲院。」今時自塔下被辭間、不赴、若赴塔中、則就佛殿、大悲咒也。」規云、凡每遇節隔宿、赴開山塔諷經、大座湯罷、鳴鐘集衆、西序排立、住持上香、維那舉楞嚴咒。回向之句、入預於斯晚之字。

小參

凡小參、初無定所、看衆多少、或就寢堂、或就法堂、齋退、侍者覆住持云、今晚小參。」令客頭行者、報衆云、掛小參牌。」當晚不鳴放參鐘。」昏鐘鳴時、行者覆住持、鳴鼓一通、衆集、兩序歸位。大衆同集。住持登座。不拈香。衣鉢侍者、引出、法座右邊立、燒香侍者左邊立、餘、中間立。一列問訊、歸位、侍香引前。」次頭首引、向法座、大衆同問訊、頭首歸班首座引前。」次知事一班、出座前問訊。都寺引前。次西堂一班、出法座前問訊、歸位訖。」燒香侍者、登法座、左手燒香、提起坐具、問訊。請法畢。進拂子。住持索語、禪客問話罷、提綱、叙謝、委曲詳盡、勤舊多、則侍者具目子、恐有遺矣。西堂、單寮、道號、東單寮、加公字、蒙堂則只云云、諸位耳。然後舉古、結座。」又請云、來夜爲衆擊節、及講免禮義。詳略使衆通知、下座。」客頭行者、唱請云、兩班、西堂和尚、單寮、大勤舊、侍者、禪客、方丈點湯。」乃就寢堂、喫湯退。

寢堂湯

小參後、就寢堂喫茶、住持入室內、侍者在戶外、接衆兩班等、入堂、住持問訊、各在座前立、住持在知事上、頭首、與住持分手、西堂、在住持對床、都聞、在首座對牀。侍者禮如常。湯罷、兩班等、對住持謝湯。住持送出、二三步、兩班等、轉身問訊。(1. 61b)

無言習

斯夜諸頭首、借上方杖拂、試登法座、禪客者、悉法堂之正面立。諸頭首、舉法堂、模樣見之。蠟燭等從頭首寮維之。兩班者、門中衆、或知音之雇之。

五更礼儀

凡遇節日、五更板鳴、住持出僧堂、歸方丈或寢堂。則方丈行者、排置爐燭、兩序大小、耆舊、江湖辦事、鄉曲法眷、小師、皆當詣方丈、插香展礼。」如見僧堂前、出免人事榜。則不必往。惟侍者、小師、沙喝、鄉黨行僕等、必往、插香展礼。住持如免、則觸礼退。恐勞(・)煩主人。若客則住持據座受之、蓋崇其位、則法全嚴矣。」四節並皆同。

沙喝事

凡沙喝、百三十員。五十員者、本掛搭、如衆僧、受(レ)俵米。殘(リ)者、諷經掛搭也。」本掛搭內、有闕、則諷經掛搭衆、望次第、轉本掛搭也。」每日放參畢、自佛殿之脇間、兩列下置徑就山頭、施食勤之。」每日勤行畢、下間之沙喝、至上間、而兩列立班、當官有觸語、而散之。與大衆同時散、非也。

每月回諷經、勤之。土地堂諷經、掛經馬銀錢、四節(・)藥師如來、勤之。二祖三佛、諷經勤之。散鐘(レ)時、向佛排立。」夏中楞嚴會、如僧楞嚴會也。行道有之。滿散、小維那宣疏、詳楞嚴會處。」鈴之番者、限五日。」四節、土地堂念誦了、就山門、點檢有之。詳土地堂念誦之處。

沙喝之當官者、維那寮(江)呼舉、直請之。沙彌頭、小維那、知客者、斯維那差之。燒香侍者、沙彌頭司之。仍結制之小維那外者、坐牌(ニ)、小維那不可書也。夏中之外者、小維那、當官依他言、幾度差替也。」喝食辭退(ニ)舉時、維那領掌、則聽以其喝食、呼舉別喝食、(ニ)而差替小維那也。故不同也。結制外者、小維那字、不書(ニ)坐牌。

惟敬云、維那一代、於維那寮、沙喝點檢有之。此時小維那、呼其名。點檢了、沙喝玄關(ニ)兩立班、維那中央立。莫勤行懈怠、件件垂示、而散之。

古就僧堂、唱物次第、參頭行者、低聲_ニ鈴番之沙喝_ミ、報之。僧堂入口、右邊立也。唱物_ノ次第_ハ、奥之僧堂_ノ處_ニ詳也。先粥已。自聖僧龕右邊、回左、至首座前、問訊高聲、請首座大眾、祝聖諷經。唱了、下堂也。堂前之鐘邊置水桶、并手巾也。住持及兩班漱口。(一・326)

粥飯_ニ、衆僧上牀時、自履牀下_ニ入之。給仕行者、觸脚儀也。粥飯了時、沙彌頭、履攪、差沙喝、則牀下履、引出之。生飯攪、差小喝食也。詳僧堂處。粥飯時、沙喝集外堂凡楞嚴頭差樣德雲龍雲寺正月二日兩度御成時定也。正月廿八日之處、詳也。又御前給仕、請伴給仕之。落髮暇、公方被出之。

古_ハ給仕_ハ小僧喝食。擇其仁。一者賞翫倩之、不報_レ給仕人者、縱雖赴、不勤之。不熟_レ喝食者除之。當代依無人、掛搭則沙彌小法迄、勤之。古無其例。見_ニ于座式奉行ノ處_一。(一・324)

凡僧沙喝、自達磨忌、不持扇。但尊宿、或古老衆、或座式奉行、被持。

東班衆、逢小僧沙彌喝食、則背向也。當時ニツト笑、非礼。

凡喝食經讀、十員也。節十二員、依器用沙彌差之。分上下間、斯十二員者、許之喝食也。除諸役_一也。

沙喝諸役者差_{スバ}、則維那、當寮_江呼舉也。或_ハ同_シ沙喝歟、或_ハ以行者_ヲ勤_メ、放參歸_ニ、呼舉_テ、直_ニ差定也。一僧之役者、以_ニ堂司行者_一、或典供行者_一、報之。

夏中事 (一・324)

夏中行事、諸堂諷經有之、則其次_ニ楞嚴會_ヲ。平生_ハ者只楞嚴會_ヲ、早晨_ニ用也。但限十二日、先早晨立諷經。次開山諷經、次楞嚴會、次半齋。

凡夏中勤行、住持懈怠時、侍香諸堂燒香、聽叫持香合。侍香懈怠時、已下_レ侍者勤之。

夏中每日堂司行者、鳴巡廊板三下、古規_ヲ。略規_ニ、住持出、則鳴大板三下、不出則不鳴。予案、舊儀、不_レ拘_ニ

住持、出與不出」。每日鳴大板三下、時鳴堂前鐘。但他之儀、後人正之然矣。」諸堂諷經時者、不鳴巡廊板。諷經回向畢時、堂司行者、報楞嚴會時、貼供行(ニ・セ)者、鳴大板三下。時堂前鐘、殿鐘同時鳴之。

夏中、維那楞嚴會時、燒香。先自僧堂山門、次第燒香、自土地堂、普庵、次祖師堂、次火德牌前、燒香。次後門大檀前、次本尊、次中央燒香。収香合、小問訊、歸位立。

楞嚴頭、夏中維那衆、其外依兄弟衆、被出扇、是者細細之習ヲシ、有之故也。或逢勤讀經、辛勞謂也。

楞嚴頭、夏中堂司行者、點供、四月十四日、扇一本、又半夏、扇一本被出之。其外又寮坊主、百疋被出之。是者警能打ト云フ謂ワレ也。(一・セ)

夏中、喝食小維那、喝食楞嚴頭、如僧規式、問訊而入相對立。沙彌頭燒香、楞嚴頭之喝食舉啓請。啓建ニハ、滿散ニハ、小維那之喝食。宣疏之也。僧楞嚴頭畢、喝食楞嚴頭者、後也。

自六月朔、楞嚴頭、維那、半行道、楞嚴頭者、始而立侍藥。雖然、住持懈怠之時、侍者各依懈怠、而無可移位。故如半夏已前立也。」夏中坐禪、不報レ懈怠、人一者、罰金半斤。

十五日 祝聖、僧藥師如來、兩開山諷經。「次喝食藥師如來。」三位禪師小齋。次二番座、次三番座、畢、上(ニ・セ)堂。」次僧楞嚴會、次喝食楞嚴會。」次南禪院半齋。」次秉拂、塔頭習。次就首座寮、杖拂、三大禪師勤之。次秉拂、預シメ搥鼓一通。次方丈點湯。

先祝聖、僧藥師如來、天授諷經、歸雲諷經。今時者不赴塔下。」次喝食藥師如來。」其後三大禪師齋。

三大禪師齋

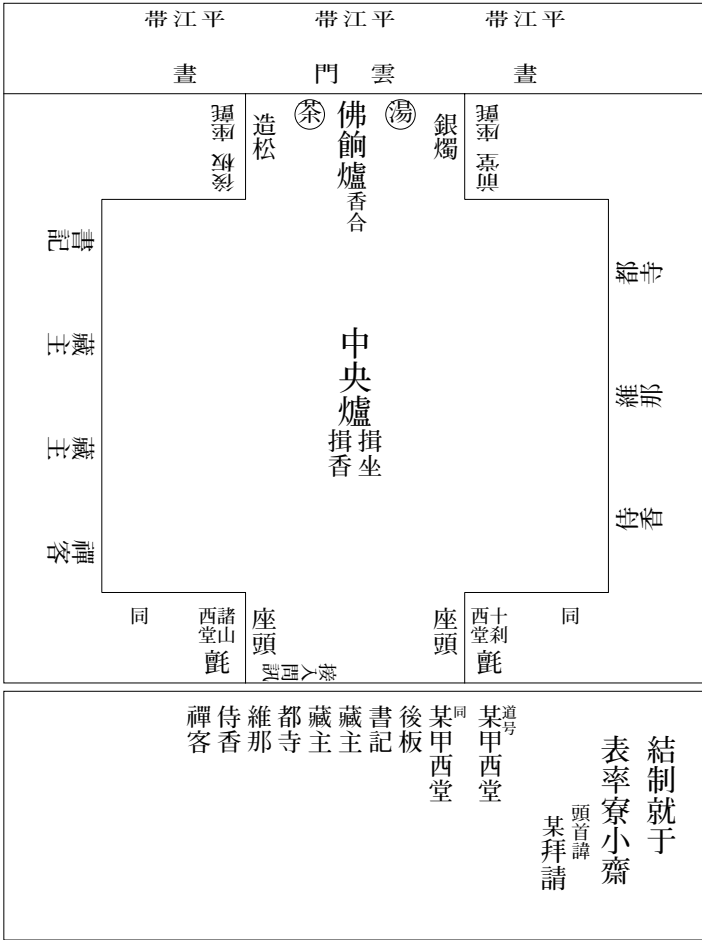
曉、點銀觸、先前堂立賓位。接入問訊。次揖座問訊。次到雲門前燒香、小問訊、轉右、中央爐前燒香、一步退、揖香問訊。而又手而出。著帽、坐位。」結制問禪人著ハ不法也。」被レ倩ニ給仕ニ、小僧喝食者、藥師如來畢テ、

(66) 赴頭首寮、限頭首前、給仕人、兩度不_レ赴法也。」喫飯了、前堂出玄關、立主位送問訊。

坐位圖

請帳圖

(1・67a)



(1・67b)

請帳

凡三大禪師、給仕者、擇仁、別被倩之、故藥師如來終、則起頭首寮。「一座式奉行人、取集扇子、盛葛籠蓋部上置之。給仕終、出之。」給仕人、限頭首前、兩度不赴。

請帳書樣、後堂已下頭首者、請帳之口、結制、或冬節、之不書也。遜前堂意也。「結制者、來十五日、冬節者、來幾日書也。」

惟敬曰、前堂之請帳者、上方、客東堂、參假西堂、客西堂、皆載之。「但今代十五日、三大禪師請帳、參假西堂載之、後堂已下頭首者、上方、客東堂、請則寮頭口報乎。今代同座不審。」

凡請帳、吾祖師忌之時者、內衆別書之、其外者不書、古之早飯者、五員之頭首寮、住持被出也。雖然勝定院殿御代、第一座外者、被留早飯也。故設齋人者依爲穩密、後板已下早飯、不請住持、故送膳必二前。凡前板者、依有三位禪師、并參假西堂、禪客之請伴、而不直大衆之一番座也。必表率寮者、客長老客西堂、悉被赴也。住持者、在其人意歟。但被辭然。「(一・七〇) 凡後堂以下頭首者、前堂寮、三大禪師齋過而請相手禪客、請伴也。禪客之勤歸、被呼、必赴相手之寮待也。禪客之僕、有齋、請伴者、頭首僕也。」

坐牌

後板已下早飯、前堂者、必主位也。其已下頭首、一列盛之。賓位者、西堂也。主對賓對者、逐次第。客長老者、別座。住持被赴也。

惟敬云、當日、三大禪師草飯、坐牌、前板後板也。坐則前堂主位、後堂賓位、其已下頭首、一列賓位也。「前堂早飯時、主者不就座也。別頭首者就座、然則(一・七〇) 各坐位也。接入問訊者、賓位也。」後堂已下頭首、又如斯。

凡東堂已上、緣下立賓位迎之、送問訊、玄關外也。立位、賓位也。

前堂草飯、四月朔。又冬至早飯、不定也。」後堂以下早飯逐日營之。

上堂

三番座終、行者搥鼓三通。先攬磬擊時、住持出寢堂。今者第二通攬磬、第三通轉鼓也。

兩班、先谷渡問訊。正面自脇之間入、向法座一行 (row) 問訊立班。次兩列、歸本位立也。」上堂并谷渡規式、詳元日處。

塔下禮

住持下座立上間、與西堂立班、西堂立瓣香、觸礼畢。」次都寺維那、與長老立班問訊、都寺立瓣香、兩展三礼畢。」頭首一班、首座立瓣香、觸礼一拜。」次單寮、諸勤舊頭、各各出而立瓣香、在兩班之後、同觸礼畢。」住持居椅子、侍者大展三拜、侍香立瓣香。」次沙彌頭、立瓣香。沙彌行者、一列大展三拜。見于元日處。(1·71a)

大鑑規

兩展之礼、但如尋常展拜之法、坐具將盡及地。住持以坐具、約而免之。逐収摺之。」今人以坐具、展開加額了。遂摺之。此非法。

古法、小比丘、見大比丘、必須展拜一問訊。便展坐具。大比丘、堅以手約免之。或以坐具、約而免之。小比丘収摺了、又慇懃必欲展拜。又展坐具、大比丘、又堅約免之。小比丘又摺了。又敬礼之心未息、乃以坐具、觸地三而拜之。大比丘、遂答之一拜。此其兩展三拜之本意也。(1·71b)

略規

凡知事、進插香兩展、免則觸礼、住持答一拜。僧史畧云、昔梵僧到此、皆展舒尼師壇、就上作礼。後生避煩。尊者、方見開尼師壇、即止之。便通叙暄涼、又展猶再拜也。尊者還止之。由此、只將展尼師壇。擬礼爲之數。所謂

菱拜也。私云、軍拜者菱拜^ス、女人拜同。不正兩展觸礼、
菱拜歟。菱^ハ、箇過^リ韻^ニ云、菱^ハ、許也。
祖臥反。

楞嚴會

鳴大鐘、大衆依圖排立。維那七堂行香、自本尊、至中央、收之、立位。」長老來臨之時、問訊向佛、行者鳴(一)磬舉啓請也。不移行道、三之段時、維那燒香、次後啓請終。舉上來也。」有楞嚴頭、則前啓請、次佛母。然後啓請迄者、楞嚴頭唱之。上來現前者、如恒。維那舉之。」次喝食楞嚴頭、喝食小維那、與僧規式、並同。」古者、就大雲菴、龜山^ノ半齋有之。近年不赴。」斯後諸頭首、塔中習。

杖拂

諸頭首、塔頭習終、而赴首座寮。」都寺、維那、侍香、客頭行者、盆小打敷、燭臺、香爐、牌拂杖、命^レ力^レ者。衣

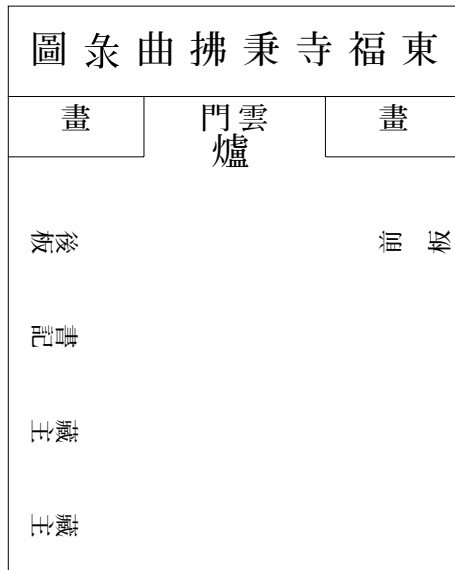
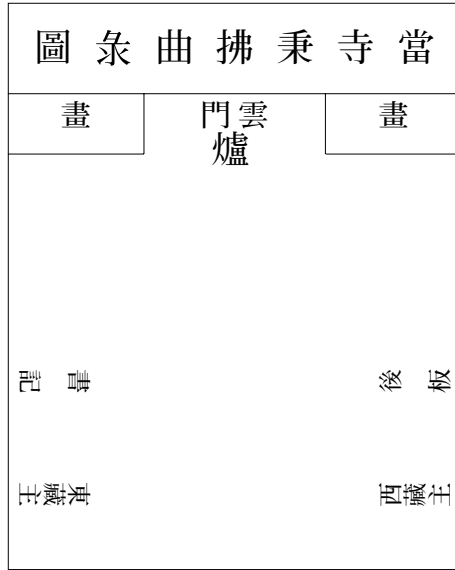
白淨衣

令持之、詣首座寮。」五員頭首、出緣立班、主位北首(一)也。(二)也。三位禪師賓位、北首也。相對問訊了、叉手而兩列入客殿。都寺、維那、侍香、列賓位、諸頭首、主位、列東西、相對問訊畢。」客頭行者、盆盛燭臺爐、置座上、都寺先出燒香、歸位立。此時頭首曲衆、一列移後也。各觸礼一拜。」次行者、取牌、渡與侍香、侍香渡與維那、維那渡與都寺、都寺捧而呈首座。自首座次第、轉西藏主、行者請取之。一番牌、(二)拂、(三)杖也。」三位禪師退、則五頭首、下緣、居東方、南首一列立班、三位禪師、相對問訊、送之。」當寮輩、西藏主、貼^レ今^レ晚^レ牌^ニ也。引合、豎^ニ切、而書之。首尾塗牛粉、出之。(一)也。

稟辭

五員頭首、詣方丈、住持相對問訊退。稟辭心也。諸頭首、一步退時、住持送之。又問訊、是^レ者、秉拂^ヲ可^レシト勤云心也。其時首座轉身曰、法座是者可^レ借賜^ニ云心也。」住持緣迄出送也。」次玄關^ニ、首座對^レ侍香^ニ曰、法鼓、是首座。雖可赴侍香寮、依煩頭首、而侍香出玄關待也。」五頭首歸寮、據曲衆、杖拂時東方一列雖併之。頭首舉辭

間、又取直立也。」前板東方、主位南面。後板東方、西面。書記西方、東面、東藏主西方、東面。西藏主東方、西面也。東西相對。(1・73b)



湯禮

首座寮輩、以香合蓋、貯丸藥、引之。頭首受服之、或不服、則各度與其方人也。」又以鍵蓋、引煎茶、或丸藥置鍵蓋之臺。各揖而吞之。」給仕者、山中小僧、倩之。或楞嚴頭有之。則必倩法也。叙衣而進之。不行(1・74a)同處。」然後鼓案內。

鼓案内

先自頭首寮、行燈蠟燭等、出之。」客頭行者、鼓打札出之。客頭進首座面前。胡跪曰、鼓之案内、首座諾。即鳴首座寮前板三下、而又鳴下間之鼓一通。」頭首聞鼓、赴法堂。兩序相對問訊、自正面脇之間、兩列入而立位。兩序立定時問訊。」次行者舉鼓訖、持行燈、抹過法堂中、而詣方丈、迎住持也。住持被出、則引回。高燭臺前、置行燈退。」住持之曲衆、氈、後者屏風等、營辦之。(一七〇)

登座

山門三位禪師、同往首座前問訊。首座受請畢、往住持前、低頭問訊。次都寺前問訊、巡至班末。次至後堂前問訊、巡班末浴主前。少間相隔、即舉手、與大眾普同問訊。叉手而過拜席、登法座。則先舉右足、或朝住持、則舉左足、可也。乃脚踏上、向椅子、問訊、回立問訊、坐定。」乘拂侍者、同方丈侍者、出座下問訊、兩序、西堂、次第問訊、如上堂礼。」此日座下、雖有東堂、不可出問訊也。」住持出問訊、首座當起身、低恭問訊。仍就座即云、侍者請堂頭和尚趺坐。」此(一七二)時聖僧侍者、至住持前、問訊、轉身登法座炷香、用左手、向首座問訊、請說法。取拂子、進首座、即索語、問答、提綱、叙謝、拈提、一一不遺。唱了、下座。」進住持前問訊、作觸礼勢、住持被辭、則復元位。」次後堂已下頭首、並同前礼。」五員頭首之取拂畢。客頭行者唱云、兩班、西堂和尚、單寮、大勤舊、侍者、禪客、方丈點湯。

方丈點湯

乘拂畢、就寢堂喫湯、如小參時。」先行者鳴板。今時方丈客殿、燒香侍者、揖入問訊、住持先到其位而(一七三)立。次東兩班、就住持下位。而次第立、次西兩班、後堂首座、就賓位而立。次參暇西堂、十刹、就(一七四)主對、諸山賓對。」燒香侍者、進中央前問訊、謂之揖坐問訊。坐定、燒香侍者、又問訊、謂之揖香問訊。湯了、又問訊、謂之揖湯

問訊。然後燒香侍者退。住持離位、一步進而立。東西兩班各就賓位、南面而列立。兩班、次參暇西堂、謝湯也。禮畢、住持先進、出在「唐戶內」、送問訊。」後次第如前。

結制冬節翌日、諸頭首、先至「相手禪客處」、拜謝。或欲展坐具、問禪堅辭之、則觸禮而退。」問禪人、必待（レ）頭首之來、行者於首座寮、打レ鼓、加黃鸚、持二行燈一、加黃鸚。又力者持二杖拂一、加二天龍一。

每日行事、後堂已下頭首、到首座玄關、列班、及殿鐘鳴。前堂首座出、左右問訊、揖引到佛殿時、先進左足也。立班時無問訊。立定時、東西兩班、相對問訊。」節日勤行、西藏主司レ之。四節秉拂、賽二牌拂一云、賽、與齋同。賤西切、持也。備用曰、若借座、借鼓則鳴法堂下問鼓。校定曰、如首座西堂秉拂、則借茶鼓。章曰、左者茶鼓、右者法鼓歟。

秉拂法語舉「方丈」(一・766)

秉拂拙語、或上堂禪客口書樣

結制秉拂拙語謹呈
堂上老師大和尚法座下伏乞
慈悲改正

首座比丘一一九拜

謹呈錄
來冬節秉拂法語
堂頭老師大和尚法座下
伏乞 慈悲

首座比丘一一九拜

結制上堂問禪拙語欽奉錄

呈
堂頭老師貌座前 伏求

慈悲斤正

參學比丘一一九拜上

小高

諸頭首佛事、節日前十五、或廿日已前、書調而舉方丈也。」當日之一會者、依人記焉。或別之一會記之。其人隨意也。」包紙、上書樣、見于圖。并乞謝語紙、(一・七六)上包書樣一封、或雙字名、或前板比丘、後板比丘書也。見于圖。

上包

拜呈來結制
冬節秉佛法語堂頭老師法座下

一一比丘九拜

上包

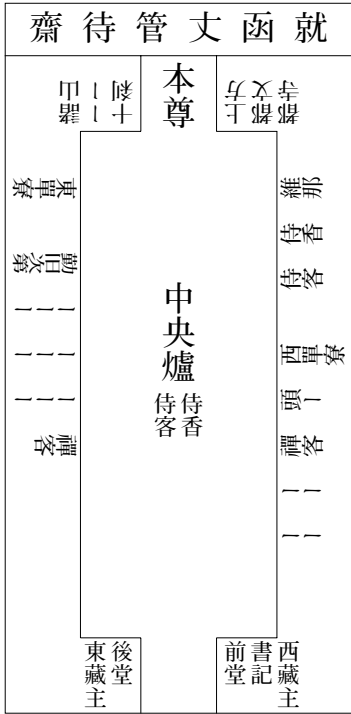
拜呈 堂頭老師和尚法座下
拜求 謝秉佛法語

一一比丘九拜
一一比丘拜求

略規

先預五日已前、都寺營辦點心。特爲五頭首、并請住持西堂、東西單寮頭客一人、維那、侍香、聖僧侍(一・七六)者、都寺、揖座、揖香、揖湯問訊。至日、齋退、燒香侍者、即令客頭行者、攜拄杖拂子牌等、人僕捧捧袱爐燭、約都寺維那、同詣首座寮。都寺炷香、觸礼一拜、三位同礼、五頭首答拜。又燒香侍者燒香。今時此禮無都寺先以牌、度首座、首座度後堂、次第同前。」次拂子、次拄杖、並同。」西藏主請牌、度與法堂承事、貼小牌。牌式、今晚、堂前下間掛之。」首座約同受請頭首、詣方丈辭、住持當力勸勉、送出、首座轉身稟云、詞見規。」又云、借賜法座、伏乞慈悲。」次就燒香侍者寮、借法鼓。」五頭首、再歸首座寮、各據曲象、候(一・七六)鼓鳴。」此時煎藥飲之。」客頭行者、覆秉拂人。次覆住持、鳴鼓一通、衆集。鼓乃用下間。住持令行者、送行燈於首座寮、五頭首同出。至法堂、正面脇間同入、歸位立定。行燈直過法堂裡、從後門出、詣寢堂、迎住持出、徑歸位。法堂左側、

安屏椅、立定。」山門三位禪師、都寺、維那、燒香侍者、同往首座前問訊。首座受請畢、往住持前、低頭問訊。次都寺前問訊、巡至班末。次至後堂前問訊、巡至班末浴主前、少間相隔、即舉手。與大眾普同問訊、拜席上行、則叉手過、登法座、則先舉右足。或曰、朝住持、則舉左足、可也。乃脚踏上、向椅子問訊。回立問訊、坐定。」秉拂侍者、同方丈侍者、出座下問訊、兩序西堂、次第問訊。如上堂禮。」此日座下、如有東堂、不可出問訊。」住持出問訊、首座當起身、低恭問訊、仍就座、免則不起身。即云、秉拂侍者、請堂頭和尚趺坐。聖僧侍者、至住持前問訊、轉身登座。炷香、用左手。向首座問訊、請說法。拈拂子、進首座、受畢云。如冬節、則輕聲云、天寒覆頂。即答畢提綱、叙謝。如首座謝語、即一一不遺、謝之。云云。先住持、即飾詞褒贊。次東堂西堂同。各各謝之。即云、山門兩序、上方三應、諸位單寮、者舊、蒙堂、前資、梅檀林中、雲堂海衆、隣對頭首、江湖名勝、適來禪客、秉拂侍者、暫到高人、法眷鄉曲、現前一會、諸位禪師、總兼備贊德業。」後堂以下頭首、謝語、畧提過了耳。」謝畢、方丈小參公案、或拈、或頌。近代叢林、允以各拈提、不知有據。」拈古訖、叉手云、久立衆慈、不耐荒寒。」下座住持前問訊、作觸禮勢、住持辭、則復元位。」次後堂已下、並前禮同。」秉拂罷、客頭行者唱云、兩班、西堂和尚、單寮、大勤舊、侍者、禪客、方丈點湯。侍者行禮、同旦望。」但湯罷、住持送出時、留五頭首、謝秉拂問訊。頭首受賀畢、歸寮。住持令行者、送行燈。」次早、方丈請茶、粥、再請時、客頭行者、就鉢位、請五頭首云、粥罷寢堂喫茶。不請相伴。只是首座分手。後堂與住持對面。書記與首座對面。藏主居首座之下。」侍者燒香、如旦望之禮法、頭首謝茶退矣。」然後東西巡察、謝昨日久立勞。」是日、庫司、就于方丈辨齋。併請茶、半齋點心。前日秉拂罷、請客侍者、預出差定。係方丈、客頭、請、特為秉拂頭首、仍請西堂、大勤舊職事人。」首座名位下、書云、某謹奉尊命。次頭首、如此書之。」齋時、特為秉拂人、并請光伴大勤舊。」請客侍者、預排照牌。西堂與住持分手。首座書記、與住持對面而坐。後堂藏主、與西堂對而坐。知



十六日 侍者勤_レ已前退。諸頭首、至_二相_一手、禪客處、拜謝。次鳴鐘、土地堂諷經、次後醍醐半齋。次芳林都
 (1.81a) 文半齋。年取

事居住持之下。西單寮侍者之下排之。東單寮、西堂之下排之。上堂乘拂諸禪客、各各分東西座。飯訖、未喫茶、侍者兩人立座、行者鳴鼓、燒香請客二侍者、分上下間問訊。歸中央問訊揖座。燒香侍者燒香。又二侍者、分上下間、上間、首座書記前、請客侍者下間。後堂藏主前、各同時對面問訊。歸中央立定。入盞、行茶偏訖、又二侍者、各如前問訊、揖茶復位中立。燒香侍者、再進爐前、燒光伴香。退身同時問訊。又歸位坐、喫茶。即進(1.80b) 果子。次行引物、然後行者、各付人僕。收盞、鳴鼓三下。乘拂人立謝茶退矣。
 別日、住持亦有上堂。委曲叙謝其乘拂人、下座。頭首當就法座下、拜謝展礼、住持約免則觸礼。更免、則問訊退。乘拂人、當於別日、請兩班西堂、大勤舊、適來禪客、乘拂侍者、或點心、或辨齋、隨家豐儉。且表薄礼而已。愚謂、便是日本榜樣乎。並不載古規。

謹奉

慈旨就于
函丈管待點心

侍司某拜請

首座

首座

書記

藏主

西堂

知客

一一

一一

罷引「茶巾紙」。入「茶子」、引茶。」罷引物、上方、秉拂人。上古ハ作リ杉原一束、扇子三本。今代五帖一本。西堂已下禪客、三帖一本也。」知客侍狀持藥侍衣者、內座、衣鉢閣、無引手物也。」住持令「客頭行者ヲ秉拂人、各送ニ五百文」。今代ハ三百文。

廿日 普庵諷經。謝上堂、鳴鼓一通、無谷渡之問訊。有座前之問訊。住持著平衣也。」上堂畢、頭首謝語礼、如常。」然後詣方丈、乞退。

廿一日 早晨日中、如恒。」舊規者、自今日、四時坐ニ禪。」每日勤行時、堂司行者、持筥筒、置佛前。筥者書「平僧之双字名、入筒。」勤行諷經、回向終、住持以指、而指筥筒。堂司行者、取筥筒、三度振合至住持前。維那出班、至住持右邊、住持拔筥、出維那。維那捧筥、呼某名時、三度不答、則其筥出聽叫也。懈怠人、上方丈、乞筥、若懈怠及數度、則住持小片紙、書「罰金之語、貼佛殿柱。罰金者一斤也。持上方丈。」坐禪解

怠罰金同前。

僧堂規式

初夜并曉、二時ノ坐禪、住持巡堂、被位之空處、令聽(ニ・ス)叫取被巾、歸方丈。

兩班寮、各置看寮、除知客并侍者寮也。」坐禪巡堂之時、某之寮看寮簡、僧堂坐牌前ニ立ル寸ハ、則不レ取ニ被巾一。都文寮者、寮長并看寮頭首也。都寺寮、納所寮、置看寮也。

粥正時

四分ニ云、明相出テ、始得レ食レ粥。餘ハ皆非時。婆沙論ニ云、明相有レ三、初ニハ日照ニ剎部樹身ヲ、天作ニ黒色一。二ニ日照ニ樹葉一、天作ニ青色一。三ニ日過樹ヲ、天作ニ白色一。三色ノ中取ニ白色一。爲レ正時ト。須舒レ手見レ掌ニ文ニ分明ナラハ、始得レ食レ粥ヲ。(1・83b)

粥齋

僧堂粥齋、維那進退事。大衆入ニ僧堂一、次庫裡ノ鼓、コタン、コタント攪レ端。而次トウクク、ツテイトウ、ク、ク、ツテ、ツテ、ツテ、トウ、テツトウク之終、堂前之鐘ヲ、カウト撞。供頭役也。鼓ト合マ一聲撞ソ。次復鼓磔攪時、維那下牀。入ニ堂内一、聖僧前燒香。而弓樣歩、而依ニ椎之臺一、取ニ椎中一、掛左手打レ之。大衆開鉢間、少程置也。」此間ニ鼓如レ前鳴之。テツトウトウ打畢ト、鐘ヲ撞ト、前椎ヲ、ハツタト、打ト。三拍子、同時合也。」次回椎而十佛名。唱終、椎聲ニ下一、後之一(ニ・ス)下者、請ニ首座ニ咒願一、椎也。首座自レ低聲、次第ニ擧レ音、終圓滿ニ、聲ヲ引而唱終也。」首座懈怠時者、書記唱之。唱終時、維那者轉身、而往ニ牀之脇ニ立レ也。」行者持ニ粥桶一入也。上間者、自首座、次第引之。下間者、時西堂、次第引之。大衆僉引畢、聖僧之龕後、兩方相列也。然后外僧堂ニ出時、住持ヲ引也。住持粥ヲ受畢、偏食之椎ヲ、維那打、如レ元ノ椎巾ヲ掛レ手、又向聖僧前問訊、出ニ外僧堂一也。」

維那出外僧堂、雖可喫粥、歸寮而食也。」汁者、自任持始而引之。齋粥、同前。後椎者、聖僧侍者役、而打也。回椎時、菩薩者左、佛者右(U·88)也。諸尊菩薩時、順回之。佛頭佛脚、口傳有之。道安法師十佛名之事、釋門正統記有之。

粥飯衆僧上床時、自履床下入之。給仕之行者、觸脚儀也。粥飯畢時、沙彌頭、履攪差沙喝也。引出牀下之履。生飯搔、差小喝食也。

履攪



生飯搔



鼓鐘

更鼓、早晚平擊三通、雲講晚之平擊三通者、坐禪已前之昏鼓、三通也。」早之平擊三通者、開靜三通鼓也。其時者、版、同事鳴歟。」或云、聞長版鳴、下鉢。(U·88)又大鐘罷、而開靜。次長擊三通之板。私云、此時方丈、玄關、衆寮首座寮、板、庫司、板、同時三通鳴之。已上四處。」次十八鐘、次三擊七通之板、謂之鉢下一也。然則長擊三通板、打木魚者歟。不知用木魚。浴鼓四通歟。四番擊故、謂四通也。一番四番非擊也。但効フトキハ餘之鼓。擊樣、則不審也。一番四通擊歟。上堂鼓者、先攪磔。擊時、住持出寢堂。不審、今不然。第二通攪磔、第三通轉鼓也。

鐘者、大鐘、堂前、殿鐘、三處也。」大鐘者、入院、或點時撞之。堂前者、新命參堂、或維那十佛名時、撞之。」殿(U·88)鐘者、長老被出時撞之。

釋氏要覽下寺院擊鼓。五分云、諸比丘布薩、衆不時集。佛言、若打二椎、若打鼓吹貝。」若食時擊者、楞嚴經云、食辨擊鼓衆集撞鐘。」若說法時擊者、僧祇云、帝釋有三鼓。若善法堂說法、打第

三鼓一。

版 木魚

長版^ハ、禪苑云、打長板者、衆下^レ鉢也。次打木魚者、衆僧集定也。 木魚、見于毘婆沙論。

寺院^ニ、懸長版處、先^ツ方丈^ノ玄關、首座寮玄關、衆寮、韋駄天堂、昏鐘鳴開靜處、已上五處也。(1・86a)

木魚者、齋粥二時用之。開靜與長擊板間鳴之。齋時者、十八鐘之前、鳴之。

木魚^ハ、諺曰、昔天竺有長者、失其妻、有三歲孩兒、後母惡之。自樓上墮水中。長者不堪悲。設齋會、鳩僧侶。

斯日三藏法師被來、長者悅、加請之。法師曰、希喫^ニ大魚^ノ肉^一。長者遽尋出之。上^レ俎、所没水中孩兒、得^ニ于魚

腹。斯故造木魚、懸精舍^{ウツ}之^ヲ。報魚之恩者乎。

土地 聖僧

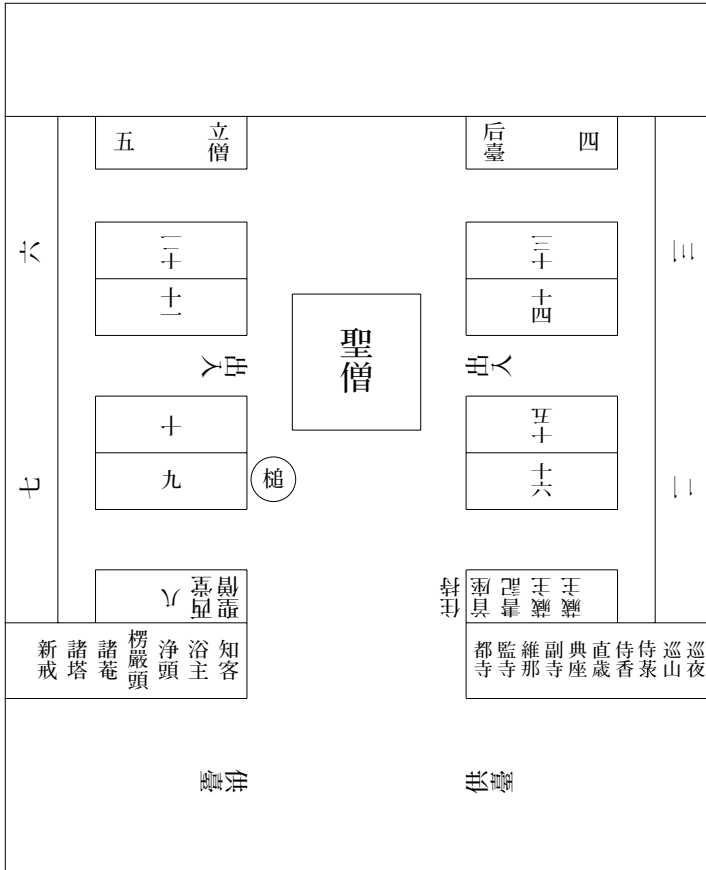
釋氏要覽下^ノ、伽藍立^レ廟。四分^ニ云、伽藍^ノ中^ニ立^ニ神屋^一。○傳^ニ云、中國^ノ僧寺^ニ立^ニ鬼廟^一、增輝記云、即鬼子母^ノ廟也 次

立^ニ伽藍神^ノ (1・86b) 廟^一。護伽藍神有十八、或是今^ノ土地廟也 次立^ニ賓頭盧廟^一。即今堂中^ノ聖僧也。始因^ニ道安法師、夢^ニ胡僧、頭白眉長。

語安^ニ云、可時設^レ食、後十誦律至、惠遠方知。和尚所夢、即賓頭盧也。於是立^レ座飯^之、寺寺成則。法苑云、聖僧元無^ニ形像^一、至宋^ノ泰初末、正勝寺僧法

願、正喜寺僧法鏡等、始圖^ニ形像^一矣。今堂中^ノ聖僧、多^ク云^ニ是^レ憍陳如^一、非也。緣^ニ經律^一、不^レ令^ニ爲立廟^一、故不^レ赴四天^ノ供^ニ故。又安法師^ノ所夢、是賓頭盧^ノ故^一。

(1・87a)



(1・87b)

取鉢法

聞「長板」鳴下鉢、要順上肩、合掌取鉢。一手托鉢、一手解鈎。左手提、轉身令正、堂前鳴、下鉢、大衆普同問訊。但是迎住持入堂、不須將手左右搖拽、下鉢時、須近前問訊。仍低細上鉢、取鉢安座前、聞槌聲合掌、云云。

展鉢法

先合掌、想念偈、然後解複帕、展淨巾、覆膝帕子、摺轉三角、向上下。莫令出單外。先展鉢單、仰左手取鉢、安單上、以兩手頭指拏取、從小次第展之。鉢拭ハ、摺令小、并匙筋袋、近身橫放、入則先匙、出則先筋。手把處爲淨頭、向上肩。鉢刷安第二鎖縫中、出半寸許。盛生飯、不得以匙筋出。則生飯不過七粒、太少爲慳食。兩手捧鉢受食。或多或少、即以右手起、止之。聞遍食椎、看上下肩、以面相朝揖食。揖罷作五觀想云。

洗鉢法

洗鉢、以頭鉢盛水。次第洗鎖子、不得下於頭鉢內、洗中匙筋并鎖子上。仍屈第四第五指、不得下先盛熟水、洗上鉢。未折水、不得先收蓋膝巾。不得以膝巾拭汗。不_レ得_レ以餘水灑地上。想念折水偈云、我此洗鉢水。如天甘露味。施與鬼神衆。悉令得飽滿。唯摩休羅細娑婆訶。收鉢、以兩手頭指拏、拏定、次第而入、複畢、合掌、想念食畢偈、云云。

僧堂記

- 粥唱物。 飲湯。 白粥。 汁菜。 再進。 澆水 或鉢水 折水 折、同兼
- 齋唱物。 香飯。 汁菜。 再進。 請折。 澆水。 折水。

僧堂記、四節者、專請上座也。二人兩列同音唱之。」且望者、喝食二人、兩列同音唱之。」粥之時者飲湯 (U・88a) 之音、自下低聲、引而唱也。大衆慎之謂也。

惟敬云、俄欠レ事、則新戒轉上坐ニ、令レ勤レ之。

右唱物次第、參頭行者、低聲鈴之番之沙喝ニ報レ之。僧堂之入口、右邊立也。」粥已自聖僧龕右邊、回左、至首座前問訊。高聲請首座大衆、祝聖諷經。唱終下堂也。」堂前之鐘邊、置棚水桶手巾、住持并兩班漱口。

凡且望上堂已前、入リ僧堂ニ、坐禪者、佛說法之時、先入禪定、靜レメテ性ニ而聞クク說法謂也。

僧堂、粥齋咒願、第一座若懈怠、則書記藏主之役 (U・88b) 也。」十佛名者、維那舉唱也。」限ニ後堂首座ニ、不レ唱ニ咒願マ、居後門ニ故也。僧堂僧者六人。

住持入僧堂時、雖謂鐘七下、前三後一、前後十一下也。」三鐘ヲ、粥齋版ト心得者、非也。」開靜之後、撞十八鐘者、粥食鐘。」午時ニ撞ニ十八鐘一者、用齋鐘也。

堂前諷經者、應菴之御影脇、二疊敷間、四枚屏風、高卓、諸位牌、置之。」行者、外僧堂下間、西方與、依居、四枚屏風者、立前也。」其日靈供牌、卓子、三具足、茶湯等、如常。」東兩班者、西頭、外僧堂之牀方一列、西兩班者、南方西頭、相對列。」住持者、向西燒香、諷 (U・90a) 經。

行齋

先取棗巾、角違ヒ摺レ之、懸ケ左手ニ、打「レ椎ヲ一下。舉ニ心經。」回向云、上來諷經功德、奉爲、耕夫餉婦、疲馬嬾牛、蠅蟻蚊虻、蝦蟆蚯蚓舂炊人力、供給淨人、在者福壽康寧、亡者往生淨土。十方 乃至 波羅蜜。

上來諷誦般若波羅蜜經、所集功德、奉爲、伐木刈茅、掘土轉石、塞水開溝、破窟燒窠、鋤園種菜、刈草掃地、過路渡流、手脚所觸、橫死夭亡、大小蟲子、莊嚴報地。十方三世 乃至 波羅蜜。(U・90b)

五點、○●●●●●、○●●●●●、○●●●●●、○●●●●●、○●●●●●、初更五點打者三遍、次打板者一、鳴柝者五 定鐘十八下。

二更一點、○○○○○○●●、○○○○○○●●、○○○○○○●●、二更二點、一本二鳴ニス火鈴一。

二點、○○●●○○○○●●●●●●、二更二點、鳴火鈴一。 以警火也。打點、行者管之。自此二點以下、至三四更、

一點ニ、謂フ庫司、番頭ト者、主レル之ヲ。

三點、○○●●●●、○○●●●●、○○●●●●、○○●●●●、二更三點、打者三遍 次敲鼓、又打二更三點者、一遍。私云、不審 火鈴、二更、

寮之燈ヲ收也。(1・93b)

四點、○○●●●●●●、○○●●●●●●、○○●●●●●●、

五點、○○●●●●●●●●、○○●●●●●●●●、○○●●●●●●●●、

大形者、先ツ三更之五點打了。都寺寮、首座寮、方丈、點之案内ヲ申也。サテ四更之一點ヲ打也。諸寮火トボス。長端之時、都寺諸堂焼香、入堂焼香歸位。坐禪。長端攪擧、而打ツ四更、一點ツ者、一度、次火鈴、次四更之二點打者三度。此間、首座入堂。一次打ツ四更之三點ツ者、三度。此間住持入堂也。龕前焼ニ・93a 香巡堂歸位。次第打ニ四更之四點ツ者三度。打ニ四更之五點者三度。一次打ニ五更之一點者三度、又五更二點打者三度、又打ニ五更之三點者三度。如此打レ點了、大鐘、住持首座都寺、此間大衆出堂也。

私云、五更之四點五點者、大鐘ニテ遣也。

三更一點、○○○○○○●●、○○○○○○●●、

二點、○○○○○○●●●●●●、○○○○○○●●●●●●、

三點、○○○○○○●●●●●●●●●●●●、○○○○○○●●●●●●●●●●●●、

四點、○○○○○○●●●●●●●●●●●●●●●●●●、○○○○○○●●●●●●●●●●●●●●●●●●、(1・93b)

五點、○○○○●●●●●、○○○○●●●●●、○○○○●●●●●、

曉攪之條、打四更一點者三遍、鼓四板一、鼓之長端ヲ攪テ、舉ル時、トウ／＼ト、七度打也。打畢而又四更之一點ヲ打者、一度。次火鈴畢也。

四更一點、○○○○●●●●●、○○○○●●●●●、○○○○●●●●●、

乃鳴火鈴警、主點、行者管之。衆僧入僧堂、坐禪。

二點、○○○○●●●●●、○○○○●●●●●、○○○○●●●●●、(U・94a) ●●●●●、四更之二點、前堂入堂、住持隨後入。

三點、○○○○●●●●●、○○○○●●●●●、○○○○●●●●●、○○○○●●●●●、四更之三點、打者三度、住持入堂、二點三點前後、宜任住持之意。

四點、○○○○●●●●●、○○○○●●●●●、○○○○●●●●●、○○○○●●●●●、四更之四點、打者三度、

五點、○○○○●●●●●、○○○○●●●●●、○○○○●●●●●、○○○○●●●●●、四更之五點、打者三度、次擊板者四、鳴柝者五、住持出堂、首座乃出、

大衆隨意。

五更一點、○○○○●●●●●、○○○○●●●●●、○○○○●●●●●、五更之二點、(U・94b)

二點、○○○○●●●●●、○○○○●●●●●、○○○○●●●●●、五更之三點、打者二度、

三點、○○○○●●●●●、○○○○●●●●●、○○○○●●●●●、五更之四點、打者三度、鼓之端ヲ攪テ、又五更三點打者一度、次大鐘。

大鐘三十六下、十八、緩、十八、急。同三十六下、三通合而一百八下。而后開靜、鼓板俱鳴矣。過堂。」

五更又云五夜。魏漢以來名夜有五、起於甲、盡於戊。故曰五夜。(U・94a)

昏鐘鳴

鼓○、板一、鳴鐘樓、鐘、緩鳴十八下、急十八下、三遍總一百八下後。

打板者三聲。次火鈴。敲鼓磔、打鼓者三。次打板者、長擊三通、チャウ~~~~~

~~~~~、チャウ~~~~~、次十八鐘。鐘罷

打板者七。次又チャウ~~~~~、チャウ~~~~~、チャウ~~~~~、

ウ (1. 96b) ~~~~~、チャウ~~~~~、チャウ~~~~~、

~~~~~、チャウ~~~~~、又敲鼓磔、而後又鳴鼓者、三通。各一通了、

敲

鼓磔。次ニ鼓ヲ鳴者三通。至第三通、與鐘相合者三、

鐘一聲。至第三通、鼓鐘相合而畢之。與早晨同。

相国寺宜竹和尚記分焉也

昏鐘鳴ト、四更之一點トニ、官寮聞テ面ノ戸一間ノ明障子ヲ、内點レ燈ヲ、爲ニ衆僧ノ往来ノ也。

僧堂ノ上下間、直堂ノ簡有三枚、平僧輪番、次第ニ渡レ之。 (1. 97a)

簡之字、面^テ輪次直堂 簡裏ノ字 終而復始

不審 旦望、粥已前、於レ外堂參頭向レ聖僧問訊、唱レ參ト。衆行者同音ニ、唱ニ不審。斯不審ノ二字、不詳。僧史略云、

如ニ比丘相見ノ、云不審謂ニ之問訊ト。律文ニ其卑者問尊則云、不審少病少惱起居輕利否。若上慰レ下、則云、不審

無病無惱乞食易レ得否。住處無惡伴ノ否ト。後人省其言辭、乃止ニ云ニ不審ト。

毎日粥罷、令茶頭行者、門外候衆至、鳴板三下、大衆歸寮。茶頭行者喝云、不審大衆和南。寮元職、 (1. 97b)

古規也。依ニ叢林淡薄ト。毎日無之。私案、礼前、夏中楞嚴會已、寮前ノ板鳴三下、表ニ此義ニ歟。

予案、卑者問レ尊、少病少惱云云。法華云、世尊少病少惱、起居輕利云云、同意歟。不審ニ二字、問レ取^{セテ}他^ニ。 (1. 98a)